
ゼロからの逃避行

るるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロからの逃避行

【Nコード】

N4729P

【作者名】

るるる

【あらすじ】

ゼロの使い魔の舞台に一風変わった形で転生した主人公。貴族の家に運良く生まれるが何事も思ったとおりにいかない。不幸街道を順調に歩む、悲劇のヒロイン（笑）の物語。

プロローグ（前書き）

この作品は”ゼロの使い魔”の二次創作にあたります。

ご都合主義成分を多く含み、オリ主最強モノでもあります。

そういった物に拒絶反応の出る方は控える事をオススメします。

プロローグ

『空虚』

私の人生はその一言に尽きるだろう。

善意や信念など持たなかった。

悪意と呼べるものすら持てなかった。

何か特別なものがあつたわけでもない。

大事なもののさえ存在しなかった。

目的があつたわけでもない。

達成した物はあつたが、それを望んだわけでもない。

感情が無かつたわけではない。

しかし感情の変化も何処か客観的に見ていた。

だからそれが自分ではない事に気付くのは当然だった。

私は自分になりたいと思った。

そして目に映る光景に色が付いたときに気付いた。

私は”自分”になれた。

これから始まる私だけの人生に胸が高鳴った。

私という存在は今始まったのだと期待した。

「カーミラ様。無事お生まれになりました。女の子です」

「はじめまして。私の可愛い娘」

ああ、確かに私は今生まれたらしい。

プロローグ（後書き）

はじめまして。本作の執筆者”るるる”です。
他の作者の作品を見て二次作品に興味を持ったので自分も投稿してみました。

原作開始までは比較的駆け足で話が進む予定です。

1. 幸せ貴族計画

私が生まれてから毎日のように母は話をしてくれた。

まさか赤子が正しくそれを理解していると思ったわけでもないだろう。

母の話は非常に分かりやすく事実だけを口にしてる印象。

辞書を読み上げるような話し方が特徴的で、それが凄く私には助かった。

おかげで現在の自分の状況は理解できた。

私の名前は、リース・アナスタシア。

ノーザンバランド伯爵家の長女だが母は妾らしい。

母の名前はカーミラ・アナスタシア。

何処か不吉な名前だが、傍目から見ても若く美人のように思える。

父はノーザンバランド伯爵家の当主、ジョスリン・ゴードン。

希に私に会いに来てくれるが忙しいようで、すぐに帰ってしまう。

年の離れた兄も居るらしい。会ったことが無いので聞いた話になる。

家族についての情報はこれで全て。

私の姓が母と同じなのは、妾の子であるために父の姓を継ぐ事が許されなかったためらしい。

父の正妻は私が生まれる前に亡くなったと母が話していた。

次に社会についての情報。

この地はアルビオン王国。ハルケギニア大陸の上空に浮かぶ浮遊大陸に存在する国だそうだ。

私はそれを記録として知っている。

記録にある小説『ゼロの使い魔』の舞台となっている世界だ。

貴族という立場は私が生きていくのに大いに役立つだろう。

ただしアルビオンであるというのが厄介だ。

内乱から戦乱に巻き込まれる可能性がある。

問題は今が何時なのかだがそれも母の言葉で凡そ見当がついた。

現国王の名がジェームズ1世だと聞かされたからだ。

更に数年前にウェールズという名の子を授かったらしい。

つまり物語の主人公達と私はほぼ同年代。

もし物語に倣って時代が進むならアルビオンに居る限りは戦乱は免れない。

しかし赤子の身では容易く行動に移る事も出来ないだろう。

だから母の話を良く聞き、出来る限りの知識と情報を集める事に専念した。

私が生まれて、いつものように母の話に耳を傾けていると驚くべき事実が告げられた。

「ちゃんと私の話した内容は頭に入ってる？」

私の子だから大丈夫だとは思うけど」

…もしかして私が話を理解してる事に気付いてる？

私の子だから？もしかして特殊な血族とかそういう特典が付いてるとか？

余りの驚愕にきつと私の表情は面白い事になってるな。

そう思っていると母は私の表情を見て言葉を続けた。

「ちゃんと理解できてるのね。よかったわ。

これで安心して知識の伝授を続けられるわね」

…今は考えてもしようがないか

母の様子からしてそのうち話してくれるはず…
しばらくは話を聞く事に集中しよう。

その後の母の話はまた辞書を読み上げるような口調で淡々と続けられた。

母の話は2年経った今でも変わらず続いた。

私はこの二年で大きな変化があった。

というのも自我と言うべきか感情というものを得た実感がある。

多分知識しか持たなかった私が多少なりとも経験を得た結果だろうと思う。

知識しか持たなかった初期と比較すると驚くべき変化である。
同時にこの変化を心地よいと感じた。

驚くべき事に母は未だに話す内容があるようだ。
同じ内容の話を母は決してしない。母が告げる話は何れも必ず”新しい知識”である。

最近話してくれる内容は魔法に関する内容だ。

私が元々持っていた知識と多少重複していた今までの話と違って新しい分野の知識に、私は興味を惹かれた。

小説によって得たこの世界の魔法知識とは大きく異なる部分が多かったのには関心した。

その一つが風の系統魔法について。

どうやら風の系統魔法は無色の純粹な魔力を物理に干渉させるものであって、明確には風では無いらしい。

” 風も起こせる ” 系統魔法が一般的に風の系統と呼ばれる。

” 偏在 ” が風系統であるというのも、物理に干渉させる系統ということならば：

なるほど、確かに正しい見方だと思える。

純粹に力を放出させるような系統は他の系統よりも比較的簡単であるらしい。

だからこそ風の高位メイジは他の系統より多い。

そして極めつけが虚無とコモンマジックについての話だった。

虚無というのは莫大な魔力と適性を必要とするコモンマジックの総称である。

コモンマジックを虚無の担い手が扱えるのは、コモンマジックもまた虚無であるから当然。

しかし普通のメイジが虚無を扱うには魔力が圧倒的に不足するため不可能である。

ブリミル信仰的に異端認定確実な内容である。

それを何でも無い事実のように話す母が少し恐ろしいと思った。

アルビオン大陸が昔に風石の影響で浮遊した。なんて話をした時は本当に驚かされた。

それを知ってる母は一体何者なのかと。

それだけなら良かったのだが…。

このままではハルケギニア中の大陸が風石によって隆起する大災害が起きる。等と母は言い切った。

母の知識が異常であるとやっと私は気付いた。

更に二年の時が経った。

私は四歳になり、母の話を聞くだけでなく使用人達とも会話を少なからずするようになった。

父は今でも滅多に会いに来ることは無く、来てもすぐ帰ってしまう。

兄とは会ったことが未だに無い。

私が妾の子であるということがかなり影響しているのだろう。

一般的な貴族の生活とは程遠いものだが、平穏な生活だと思う。

そんな暮らしを続けるうちに自分の目標を見つける事が出来た。

それは”平穏な暮らし”を続けたいという願い。

貴族の生活というのは大きな利権に守られており、望みどおり平穏に過ごすのに最適だという事。

貴族の血を授かった私には魔法を扱える素質が備わっている事。

魔法の力は私を様々な害悪から守るのに最適な手段である事。

他の貴族達との政争には妾の子という立場と私が女性である事から巻き込まれにくい立場にある事。

男性かつ次期当主ともなれば政争で暗殺や粛清等の対象になる可能性が高い。

しかし女性かつ妾の子であればその可能性は多少低くなる。

無いとは言えないが、上手く立ち回れば回避は十分可能だと思う。

私の知ってる物語の通りに話が進むのであれば、それにさえ巻き込まれないように立ち回ればいい。

大陸隆起の危険も既に浮いてるアルビオンなら何とかなる。と思いたい。

この目標の為に使える手札はかなり多く持ってる。

何しろ母から貰った膨大な知識はこの時代においては異端を通り越して異常な域まで達している。

私自身が持っている生前得たであろう知識も同様。

それは物語の流れだけじゃなく、科学や医療の知識も含まれる。

ただし科学や医療の知識は、私自身が世に公表することは絶対に無い。

それだけで物語に歪みが出る可能性があるし、何よりも私の名前が有名になることは平穩とは程遠い結果にしかないからだ。

世界を救うだとか、国を良くするなんて事は勇者様や王族、執政者に任せればいい。

私は私が幸せならそれで満足。

平民より独善的な考えだと思う。

貴族としては最悪な考えに分類されるんじゃないだろうか。

という話を生前云々を除外したうえで母にしてみた。
それに母はこう返答してくれました。

「貴方らしい考えね。その目標は素晴らしい物よ。流石は私の子だわ」

母よ…私には貴方が分からない…

2. プリミル信仰やばい

ある日、突然母から大事な話があると呼び出された。

私にとっては母の話は全てが重要な内容であつたのだが、母から大事だと表現される話は今まで無かった。

そのことを不思議に思いつつ母が話し出すのを待っているのだが：

ものすごく話し辛そうにしている：

嫌な予感しかない：

「……実はね、私は平民の娘なんかじゃないのよ」

何だそんな事か、母がただの平民だと言われたほうが驚くさ。

異常なまでの質と量の知識を持つ母が平民なんて言われるほうが信じられない。

「では平民メイジですか」

平民メイジというのは元貴族の事で、魔法を扱える貴族が地位を失った者の事だ。

それにしては嫌な予感が消えない。

「違うわ。人間には吸血鬼なんて呼ばれている種族よ」

…えーっと。冗談を言う母じゃなかったはずだ。

そうだ生前の知識に感情を落ち着ける方法があつたはずだ。確かに素数を数えるとか何とか

2, 3, 5, 7, 11, 13, 17, 19…

…よし、落ち着いたはずだ。とりあえず真偽を問わねば…

「……冗談ですよ？血を吸ったり飲んだりしてるの見た事ありませんし」

「血を吸うから吸血鬼って呼ばれるんじゃないで、吸血鬼だから血を吸うって言われるのよ。」

つまりあれか。吸血鬼だからって血を吸う必要があるわけじゃないと。そして吸血鬼の子は吸血鬼。という事は私も吸血鬼？でも吸血鬼の成長は人間と比較にならないほどに緩やかだったはず。ということは私は人間？でも貴族なのか？それとも平民のように魔法が使えない？吸血鬼は確か先住魔法が使えるはず。私はそれを使えるのか？いやそもそも父は本当に貴族なのか？会ったこともそんな多いわけじゃないし吸血鬼っていうのは人間との見分けが殆どつかないと聞いた事がある。そういえば血って美味しいのかな？私が吸血鬼ならそれはもう美味しく感じるんじゃないだろうか。待て待てそんな事より重要なことがあるはずだ。吸血鬼と貴族の間に子供が出来るかどうかという知識は母から教えてもらってない。って

そうじゃない！もっと大事な事だ。私の根底に関わる事態。

：母が吸血鬼だったら私は到底平穏な暮らし等出来ない！

ブリミル信仰的に亜人は悪しき存在で滅ぼすべき対象。

吸血鬼の子が人間であつたとしても、奴らはそんなのお構いなしだ。私がいざという存在であれ、ブリミル信仰の敵だというのが確定してしまった。

確かに貴族というのは比較的安全な立場だし恩恵も大きいけど、それが亜人となれば話は別になる。

貴族なんて立場は亜人という現実の前には紙くず同然の地位だ。

いや冷静に考えれば、ばれなきやいいんじゃないだろうか。

人間を装って暮らすことが可能なら貴族として生活するのも問題は無い。

ばれなきやいいんだ。

なら確認する事は私がどういう存在か、私も吸血鬼なのか、それとも人間なのか。だ。

「私も吸血鬼ですか？それとも貴族？」

「それは難しい質問ねえ：
人間じゃないのは確かじゃないかしら」

母が返答に困るという事は今まで無かった。
という事は考えられるのは

「もしかして分からないので？」

「分かった事もあるし、まだ分からない事もあるのよね。
だから分かった事だけこれから貴方に話すわ」

そこから、恒例となった母の辞書を読み上げるような話をただ聞く
という行事がはじまった。

話をまとめると以下の通りだ。

私は吸血鬼じゃないが、貴族でも無い。全く新しい存在。所謂ハ
ーフである。

吸血鬼と貴族の子は普通であれば吸血鬼となるらしい、しかし母
は一般的な吸血鬼とは違うらしく例に当てはまらない。

私には先住魔法と系統魔法どちらにも適性があるが、系統魔法は
精霊に嫌われるので一度使えば先住魔法が使えなくなる。

母は始祖と呼ばれる吸血鬼であらゆる知識を集め数千年を旅して
暮らしていた。

始祖は血を吸う必要が全く無く、一般的に吸血鬼と呼ばれる種族の特性は殆ど当てはまらず人間に近い存在である。

同様に血を必要としない貴族との間に生まれた私も血の摂取は必要無い。

始祖の大きな特徴は不老であることで、永遠の寿命を持つが子を為すと衰弱が始まり数年で死に至る。

私自身も子を為せば数年で死に至る性質を持っている。

始祖は生まれながらにして精神と知能が高い水準にあるが、私の場合は知能は高いが精神が人間に近い。

肉体の成長に関しては、始祖と通常の吸血鬼には大きな違いがあり始祖は生まれて二十年は成長を続け以後停滞する。

私は母の見立てによると、始祖と同じ成長をしてるので二十年もすれば不老になるとのこと。

とんでもない種族である。

そして私自身、理不尽なスペックを持つてる事も理解した。

ただし不可解な事もある。

生前から持つ知識。こればかりは謎のままだが、“転生”と呼ばれる現象だと割り切るしかない。

しかしその原因を追究する時間は不老の私ならこれからいくらでもある。今考えるべきことでは無い。

現在問題となっているのは…

「吸血鬼である事が以後露見する要素はありますか？」

平穏な生活が続けるなら今の立場を保持しなければならないわけで…

「私が死んだら、間違いなくばれるわね」

…さようなら貴族としての平穏な生活。

こんなにちは異端としての逃亡生活。

そして母の無情な追撃。

「私はあと半年も持たずに死ぬ事になるわ。」

早いうちにここから出て行ったほうがいいんじゃない？」

母よ…私は永遠に貴方を理解する事は無いんでしょうね…

3. 貴族生活終了

逃亡生活確定から二ヶ月が経過した。

母はあれ以来、吸血鬼の始祖についての話を延々としてくれた。母の衰弱は目に見えて明らかであり、あと数ヶ月の命だと傍目にも理解できた。

それはつまり私の貴族生活も残り僅かになったということ。

母はもう話せる事は無いと言って、部屋に閉じこもって静養している。

最後に母が言った台詞によって、私はほんの少しだけ母を理解できたと思う。

「私は貴方を愛して無かったわ。

でも今この一瞬だけは愛してる。そう思えるの。

さようなら、私の愛しいリース。」

「さよならお母さん。

私は貴方を愛してたよ。」

部屋に戻った私はしばらく放心状態だった。

目尻からは水が伝った跡が頬にのびていた。

はじめて愛するという事の意味が分かった気がする。

悲しいという状況のはずが、自分に感情があることに感動していた。頬を伝った涙は嬉し涙だったのかも知れない。

かといって感傷に浸る時間の余裕は今はない。

急いでこの家から出なきゃいけない。

始祖は死と同時に灰になるらしい。

そんな異常を用人が目にしたらどうなるか何て分かりきってる事だ。

だからその前に家を出る。

事前に逃亡後の潜伏場所は決めてあるし、家の警備網も頭に入ってる。

母が正妻でなく妾だった為に警備は貴族の住む屋敷よりずっと甘い。

だからこそ誰の目に付く事も無く抜け出す事は容易。

もし見つかったとしても、私には一つだけ使える先住魔法がある。

”反射”

エルフ達の扱う物と比較すると御粗末とも言える出来だが、逃亡が確定してから私はこの魔法だけを必死に修得した。

系統魔法のライン程度までならギリギリ返せるくらいの出来。

トライアングルスペルともなれば簡単に破られてしまうだろう。

逃亡中に見つかっては全く役に立たないだろうが、屋敷とその周囲であれば精霊との契約は済んでいるため使える。

何しろ屋敷の警備が一番の難関なのだから敷地内で使えば十分と考えてのことだ。

いざ屋敷を出て庭を慎重に進み使用人の使う裏門が見えてきた時、自分の落ち度に気付いた。

…なんで裏門に警備兵が居るの？普段なら誰も居ないはずなのに！？

良く目を凝らして、その警備の服装を見て重要なことに気付いた。

…ノーザンブランド家の家紋？兵が着るような服じゃない、あれは直系貴族の着る服だ。

見た感じ若い。二十歳に満たないだろう風貌…

そこから考えられる人物は多くない、そのうち最も可能性が高いのは未だに会ったことも無い兄。

アルジャーノン・ゴードン。

なにやら誰かと会話をしてる様子だ。

「誰も外に出してないだろうな。使用人も含め誰もだ。」

「当然です。些か性急でしたが手筈通り手勢も集めてあります」

「あの女は優れたメイジだと聞いている。体調芳しくなく魔法もろくに使えない今しか機は無い。

急な話ではあったが、伯爵家に後妻にもならぬ妾は他の貴族から良い心象は得られぬ」

「旦那様への報告は、賊の仕業と？」

「当然そうなる。使用人は生かせ。貴重な証人となるだろうからな。目的はあくまであの女と娘だ。珍しい銀髪だからすぐに判別できるだろう」

「アルジャーノン様はどうされますか？」

「私を使用人に見られては台無しだ。裏門を見張り誰も出さぬようにする。」

残念ながら私を見た者は全て殺めることになるだろうな」

「では2人程ここに残しましょう。貴方様に何かあっては困りますしね」

「不要だ。それよりも確実に仕事をこなせ。

私とて火のラインだ。自分の身は自分で守る。

どのみち、ここの使用人達は皆平民だ。危険などあるはずも無い」

「……わかりました。では仕事が終わרי次第正門から出ます」

…あれが私の兄か。しかも私と母の暗殺が目的とはね。

妾とその子が一族内でどう思われるかなんて考えてなかったなあ。

暗殺者達は全部で5人程。その全てが屋敷に向けて駆けていった。

残るは兄一人…反射を修得しておいて本当に良かった。

ライン一人相手であれば逃げ切る事は出来ずとも返り討ちに出来る。

先住魔法を使う以上、場所を変えては致命的なために逃げるといふ手段は使えない。

…はじめての実戦の相手が腹違いの兄とはね。

相手が兄だというのに思考は落ち着いてるあたり、やっぱり私は人間とは違うんだろうなあ。

私に攻撃手段が無い以上、不意打ちも無理だろうし正面から相対するか。

「そこに居るのは誰だ！？出て来い！」

…出て行く前に気付かれてしまった。
まあ結果は同じか。

そう考えてゆつくりと兄が私をちゃんと視認できるように近づいていく。

「御機嫌よう、お兄様？」

なかなか素敵な事をお考えのようですね」

思いつきり皮肉ってやった。

「お前がリースか。まさかお前のほうからやってくるとはな。

これから死ぬ者に何かを語る必要はあるまい！」

兄が詠唱を始めるが、私はそのままそれを静観する。

魔法を撃ってもらわないと私は勝てない。

…詠唱からするとあれは火のラインスペル”フレイム・ボール”か。
なるべく近くで反射しないと避けられる可能性があるなあ。
となれば、思いつきり近づいてやろう。

そう判断すると同時に私は兄に向かって駆け出す。
追ってこれるような手傷では困る。

「愚かだな。魔法が何たるかも知らぬ小娘が！」

灰も残らぬよう燃やし尽くしてやる！フレイム・ボール！」

ポウッ！と大きな火球が放たれるが、それを見て私は思わずニヤリと笑った。

至近距離での反射。

反射に成功した次の瞬間、兄の悲鳴があがった。

「なっ！ぐあああああああ！！！」

…思った以上に人の焦げる臭いというのはきついなあ……

っと見てる場合じゃない、これならコイツは追って来れない。

屋敷に入った奴等が出てくる前に早く逃げなきゃ！

それからは脇目も振らず、一心不乱に外に駆け出した。

敷地を出て平原を駆け抜け森に入っても足を止めずに走る。

時間にすれば6時間近くは走ったと思う…夜が明けてきた頃にやつと足を止めた。

目的地にはついた。といっても周囲には何も無い。

当然だろう。私が潜伏に選んだのは森の奥深くなのだから。

とりあえず寝よう。疲れもそれなりにある。

これ以上は動けない。

5歳にして6時間も全力で走り続ける事が可能な吸血鬼の肉体に今だけは感謝してやろう。

最も、吸血鬼じゃないなら逃げる必要も無かったのだけど…

4. 精霊は語る

精霊って存在は色々なのが居るらしい。

物語に出てくる有名な水の精霊は、人間の理解を超える性質と性格を持つのが良い例だ。

私が何故突然こんな事を考えているのか。
それは目の前の存在が原因だ。

「急に黙り込んでどうした。
ほれ、もっと我を楽しませるような話をしてみるが良い」

「精霊というのは理解の範疇を容易に超えるものだ感慨に浸ってたんですよ」

「吸血鬼の始祖であればある程度は理解できるはずなのだがな…半分では理解できぬのか」

「私の知ってる精霊と違いすぎるわ…」

「お前は他の精霊を知っているのか！火か？水か？それとも土の奴だろうか？」

「水の精霊です。又聞きというか、知識として知ってるだけですが」

精霊ってのがこんなお喋りな奴だとは思わなかった。
こいつとの出会いはつい数時間前……

人が全く寄り付くことも無いであろう森の奥深くで私は逃亡してから何とか生活をしてた。

衣食住の食と住を確保するために私の持つ知識を総動員し、曲がりなりにも安定して生活するまで一月もあれば十分だった。

衣類の問題だけが残ったが、これは人と交流を持たない事を前提とした今であれば大した問題じゃないと切り捨てた。

多分、今の私を他の人が見たら野人だとか野生児だとか言われるだろう。

それくらい元々着てた衣服はボロボロ。胸と腰を覆うくらいしか残ってない。

靴も擦り切れて使い物にならなかったから捨てた。

近くに泉があるので一応清潔は保っている。

私に残った女としての気持ち汚れた自身に納得できなかったのがある。

家を出る前に短く揃えた鮮やかな銀色の頭髮も今はかなり伸びてきて、頭の後ろで束ねてある。

所謂ポニーテールというやつだ。

食事は森にある豊富な果実や野草でなんとかなっている。

先住魔法によって火を熾すこともできるし、水源も泉がある。

肉なんて久しく食べてない。血を吸いたいとも思わない。

偏食生活ではあるが、始祖の肉体はそれを補って余りあるようだ。

ガリガリに痩せてしまうかと思ったがそうでも無い。

この肉体は何とも素晴らしい性能だと再認識。

寝床は大木の根の下にあるスペースを使ってる。

魔法で地面を錬金したかったが、錬金は系統魔法。

一度使ってしまったら先住魔法が使えなくなるので諦めた。

仕方ないので枯草を敷き詰めた床で寝起きしてる。

雨が降ると大惨事な住まいだが、この肉体はその気になれば一月くらいは寝ずに過ごせるようだ。

母の話だと始祖は睡眠を全く必要としないらしいが、貴族の血を持つ私は睡眠が少しは必要らしい。

と、そのような具合に生きるだけなら不自由はしなかった。

そんな生活を一年近くも続けた頃、次の段階を考えるようになった。

それは知識を集めること。つまり人の社会に溶け込んで生活する方

法についてだ。

母の血が知識に飢えてるみたいでぞつとしないが、何も考えずに生活していると自然とうずうずしてくる。

しかしながら、私は究極的なまでに臆病だ。

異端として殺されるのは嫌だ。

ばれないように暮らす自信は全く無い！

だからこそ身を守る術に魔法を頼る事になるのは自然だったと思う。使える物は使うべきだと先人も言っていた。はずだ：

豊富な知識があれば十分だなんて思っていない。何故ならこの知識には大きな欠点がある。

あくまで知識で、しかも膨大な量なのだ。

数万冊にも及ぶ辞書を持ってる。その程度でしかなく。望んだときにぱっと必要な知識が出てくるわけじゃない。

記憶容量はでかいが、それを上手に扱えるほどの処理能力が私には無い。

だからこそ”これさえあれば大丈夫！”という知識が必要なのだが、今持ってる知識の中に該当するものが無い。

「不老なんて要らないから不死が欲しかったわ：

ねえ大樹さん。貴方は長生きなんでしょう？何かいい方法あったら教えてくれない？」

…なんて木に話しかける不思議系少女を気取るなんてかなり重症かもしれない。

あらゆる自然に精霊が宿るのなら生命もまた自然なのだから精霊が居てもおかしくないのにね…

そこまで考えが至った瞬間、周囲に低く唸る様で静かな声が響いた。

「私の存在を肯定した生き物が在るとは、長生きはしてみるものだな。我は永遠の存在であるから長生きという概念は無いが」

…幻聴が聞こえてくるとはもう私はダメかもしれぬ。

そもそも生命の精霊なんてものが存在したら常識が悉く覆るだろうに…

「どうした不可解な表情をして。いやその表情は知っているぞ。現実から逃避したときに単なる者が見せる表情がソレだ」

…現実逃避すらコイツは許さないらしい。

とりあえず話してもして知識を集めよう。木の精霊なんて聞いたことがない。

うん。考えてみれば新しい知識が向こうからやってきてくれたんだ。前向きに考えねばいかんね。

「一応お聞きしますが…貴方は精霊さんですよ？何の精霊でしょう？」

「我は生命の精霊よ。私の存在を肯定したのは我が知る限りお前が

はじめてだ。我としたことが感情が昂ぶるのを抑えられぬわ」

：精霊にもそんな感情あるんだね。

しかも生命の精霊か。あらゆる生物の生殺与奪の権利とか持つて
そんな精霊だ。

「生命ありき者との対話は我にとってはじめてのことだ。そして喜
ぶべきことだと我は考えている。何でも聞くが良い。我も同様にお
前に問いかけよう」

っと、このような感じでこの精霊との遭遇を果たしたわけである。
そして冒頭に戻る。

「水か：あれは我とは相性が悪い。といっても水が一方的に我を嫌
っているのだから。」

「少し気になったんですが、さっき他の精霊について、火と水と土
って言っていましたよね。風とは考えなかったの？」

「風だと？あの混ざり物の事か。あれは純なる精霊ではないからな。
我は会ったことも無い。」

「ああ、風は火と水の副産物とかそういう感じですか？」

火があればそこに気流が発生する。水が動けばそれだけ空気は流動
する。

だからこそ混ざり物と呼ばれる。そう思ったが：

「あれは自然の副産物である。それこそ全ての精霊が起こした結果に生まれる物だ。故に混ざり物と我は呼んでいる。

我々精霊は自然に宿るが、風は魔力に宿る。魔力は自然では無い。故に純なる精霊とは違うのだ」

：なるほど風は結果。そこに在るものじゃないから純粋な精霊ではないのか。

火はそこに在る。水もそこに在る。土もそこに在る。生命もそこに存在するものだ。

しかし風はそこに無い。そこに在る別の物が動いた時に発生するものだから純粋な精霊では無い。

なら風石とは何だろう？アレは風の精霊が宿った石では無いのだろうか？

「風石とは風の精霊が集まった物なんですよね？」

「風石と呼ばれる鉱石は知っているが、あれに精霊などいないぞ。あれはただの魔力の塊だ。

そもそも風石が精霊が集まった物であれば地中になどあるわけが無かろう」

言われてみれば確かにその通りである。空気の無い場所に風が吹くわけが無いのだから：

そこで大隆起の話を思い出した。

「地中に埋まった風石によって天変地異が引き起こされようとしているのは知っていますよね？」

生命が多く奪われるような自体故に貴方に無関係とはいかないと思うのですが、止めないのですか？」

「面白くも無い話だな。何故そのような事をしなければならん。我は生命なのだ。人間ではない。」

天変地異が起きようとも生命が絶滅するわけではない。人間が絶滅しようとも知った事では無いな」

…ダメか…

しかしこの精霊の話は新しい知識の宝庫だ。出来る限り長く会話を続けたいな…

「そういえば精霊というのはそれぞれ自然に宿るのですよね？
貴方は何故樹なのです？生命なら他にも色々あるでしょう？」

「何となくだな。誰も我を知る事は無かった故に何でも良かったのだが、樹なら動く必要が無いのでな。」

我は動くのも嫌いであるし、形を変えるのも面倒だと思ったのだ。
他の生き物は何故あも無駄に動き回るのか我には理解できんな」

生きるためにしなきゃいけない事が多いのだから当然なのだが、それが理解できないらしい。

生命の精霊さん…生前の知識によれば、貴方のような人をニートと呼ぶらしいですよ…

4. 精霊は語る（後書き）

独自設定と独自解釈のお話でした。

詰め込みすぎて分かり辛いと思いますので何時か改訂する予定です。

5. 不良不死

生命の精霊との遭遇から数日が経過した。

精霊との会話も慣れたもので敬語を使わない程度には打ち解けた。

どうやらこの精霊は正しく存在を肯定しなければ認識できず対話も出来ないらしい。

そこに居ると思うだけでなく否定を一切しないと声すら届かないらしい。

：私としては思いっきり否定したいんだけど、否定する要素が無い。例えば水が全て水の精霊かと言われればそれは違うと答えるしかない。

つまり全ての生命が生命の精霊かというのも当然違うわけで：そう考えればコイツという存在は居てもいい。というより居て当然とも言える。

「我を否定しないというよりは、お前は我を否定できないのだろうな。実に奇異で稀少な存在だ」

と、こうなるわけである。

「それよりも、先の話は興味深かったな。不老でなく不死の力を得るための魔法であったか」

それは私にとって目下最優先の目的である。

それを得て満足するものでなく、あくまで手段として必要としているだけだが：

「まあ、そんな方法がすぐに見つかるとは思ってないんだけどね。でも無いわけじゃない。それは貴方達精霊が証明してるでしょう？」

「確かにその方法は存在する。そしてお前はそれを得る方法も既に持っているな」

：なんだって？

方法を持っていると言われても、私の持つ知識にそんな方法は存在しないはずだ。

「お前の持つ知識は確かに豊富だ。我ら精霊よりも多いだろう。それは我も認める。

しかしお前が持つのは知識だけではないだろう。目の前に在るではないか。知識でないがお前の持ち得るものが」

「目の前には、貴方しか居ないんだけど：もしかして貴方なら私を不死に出来ると？」

「やろうと思えば可能だ。最もそれは完全な不死とは言えぬ。精霊も死ぬことはある故に完全な不死というのは我を否定するか

らな」

…やろうと思えばときたか…つまりただではやってくれそうにないということになるな。

完全ではないというのも気にかかる。

「完全じゃないってことは死ぬことがあるのね？」

「死の概念は覆ることが無い。死は回避できぬ。しかし我の力によってその肉体は即座に生命と共に修復されるであろう。

本来であれば老化はするのだがお前の場合には元々不老であるから問題はあるまい。しかし始祖の死は覆らせぬ。

如何様な対価を支払ったとしても、我がお前から死を完全に奪い取ることはせぬぞ。」

…高速自動回復…いや死んでも甦るのなら高速自動復元か。

確かにそれなら不死と言えるかもしれないな。

「死の条件は本当にそれだけ？」

「我が消えれば死ぬ事もあるが、それはまず無い」

「…それで貴方にそれを頼むとしたら対価に貴方は何を望むの？」

「生きるということは何れ死ぬ事でもある。死なないのであれば生きていない。それを我は認めることはない。

我が欲する対価はおそらくお前にとっては非常に高くつくことになる。それでも良いのか？」

：子を為せば死ぬ。しかしそれ以外の要素ではまず死ないと：これ以上なく魅力的だな。

しかし対価を明言しないのが気になる。後だしでの要求なんて冗談じゃない。何としても先に聞き出さねば…。

「その不死性で私には十分ね…。

だから聞かせて。貴方が望む対価は何？」

「我はお前と共に在ることを望む。我を連れて行け。

そして我はお前が平穏を望んでいるのを知っている。故に貴族になるがよい」

：連れて行くのはいい：いや良くはないか？いや私にしか認識できない精霊なら問題は無いな。

けどもう一つは大問題だ。というか私が平穏を望んでると知っていながら貴族になれとかただの嫌がらせだ。

波瀾万丈な人生を歩めと、暗にそう言ってるんだろう。

しかしその要求には穴がある。私が貴族になっても平穏な人生を過ごすことは不可能じゃないってことだ。

「条件はその二つだけでいいの？後から条件を出されても飲まないけど？」

「ならば今のうちに言おう。

貴族になりすぐに位を捨てるのは許可できぬ。

今より十年以内に貴族の地位を得て、以後貴族として生き続けよ。お前が貴族でなくなった時に、お前が我を楽しませて居なかった

ならばお前の不死性を我は奪おう」

「命を奪うわけじゃないのね？ 私にとって都合が良すぎない？
それに貴族になれってつまり爵位を持てって事？」

…そう、旨い話には必ず裏がある。といってもそれが精霊には当てはまるとは思えない。

人生を左右するこの取引には慎重になりすぎるくらいでないとはきっと後悔する。

「不死というのは必ずしも良いものではない。我はそう考える。
そして我にとってお前は貴重な存在だ。

故に対価はお前にとって都合の良いようであつたとしても、我にとっては等価値であると考えている。

我の言う貴族は爵位を持つ事以外にもつがいとなる事、貴族の家の子を含む。故に爵位は必ずしも要するわけではない」

…やっぱりこいつは精霊なんだなあ。

元々不死性を持つ精霊ならではのと思えば当然とも思えるけど…
こいつにとっての不死の価値が安すぎる。それが私には理解できない。

「分かった。その条件で構わないわ。」

「何、簡単な事だ。我と盟約を結べ。
それだけでお前は私が許可するか、お前自身が死ぬ事を選ばぬ限りは不死となる」

「それだけでいいの？」

「ああ、私の杖を折り杖とするが良い。その杖を持てば我は常にお前と共に在ることも果たせる。

杖との契約が我との盟約も兼ねる。しかし同時に精霊から嫌われるがな」

「貴方、大いなる意思って奴に嫌われてるんだったわね…

となると先住魔法が私には使えなくなるのか。まあ不死性の対価としては安いかな」

…系統魔法をこれから修得する必要があるけど、私としては万々歳な結果だ。

にしても、貴族にならなきゃいけないのか…ゲルマニアで金払って貴族になればいいかなあ。

「言い忘れてたが、貴族になるなら王国以外認めぬぞ。
金銭で得た貴族位では我が楽しみめからな」

…コイツ…後だしするなって言ったのに。

ああ、まだ契約前だから後だしにはならないのか…

となるとシュヴァリエが一番楽な方法だけど。軍属は嫌だから別の方法でどうにかしないとなあ…

「せいぜい波瀾万丈な人生を送るがいい。我はそれを期待しているからな」

生命の精霊よ…私は何が何でも平穏を手に入れてお前を後悔させてやる…

6. 四系統と五行

精霊との契約を済ませてから数年が経過し、色々と私の生活にも変化があった。

ひとつは精霊の関係。

お互いに軽口を叩き合うほど良好かつ険悪な関係だ。

いちいち”生命の精霊”と呼ぶのも面倒なので、”ユッグ”と名付けた。

コイツは当初こそ大層気に入ったみたいだが、元々が神様の異名だったと告げると微妙に嫌そうな雰囲気を出してた。

神様の名前が付くなんていいことだと思うのだが、コイツは気に入らないらしい。

本人が気に入らないからこそ、私はユッグと呼び続けるわけだが：

今ではユッグも杖の形をしているので以前のように低く唸るような声は出さない。

威圧感ある口調はそのままだが、声自体は軽くなったので私も気軽に話しかけられる。

不死性についての詳しい条件なども聞くことができた。

ユッグが存在する限り、高速自動復元は有効らしい。

つまり私が子を為す以外で死ぬには、この世全ての生命が根絶することユッグが消滅しなければ無理との事だ。

ただ、傷を負えば痛いし、毒や病気に苦しむ事もあるという。一瞬で治るが…

ちなみにユッグの声は他の者には聞こえないようなので、他人から見れば私は延々と独り言を呟く頭の可哀相な子に見えることだろう。

…うわ、想像したらめっちゃ痛い子だ。私めっちゃ痛い子！

「どうした急に。我を楽しませるためだとしても、その発言は理解できぬぞ」

…声に出してたらしい。今は独りだからいいが、何れ人の社会に出たときは気をつけないとな。

「ちょっと自分を客観的に見てみたら錯乱しただけよ。気にしないで…」

今更な話だが、私は思考の際の口調と実際に言葉にする口調がかなり違うらしい。

そのことをユッグに話した時の事は少なからず衝撃的だった。

曰く、「お前は魂と思考が、他の者と違って限りなく離れたものになっているようだ。混血故かもしれぬが、明確には我にもわからぬ」らしい。

何か不都合があるわけでもないので放置している。というより考えるだけ無駄な事だと判断しただけだ。

次に変わった事と言えば、魔法の練習をはじめたこと。

私自身、知識として魔法を扱う理論や手段は知っていたので効率的に練習は進められた。

どうやら私の適性系統は水と土らしいのだが、明確には違う。適性属性が木なのだ。更に言えば生命という属性に適性を持っているらしい。

混血故の特異体質は今更なのであまり混乱はしなかったが、ユッグと色々相談するとこれまた微妙な事実を教えてもらった。

「属性というものは五つあり、それらは火・水・木・金・土の五つだ。

人間らの言う虚無とは属性の無い物の総称とも言えるな。

我はそのうち木の属性に当たる。」

などと異端まっしぐらなありがたいお話を聞かせてくれた。

所謂五行説というのが実際の属性分類に当たるらしい。

木の適性を持つなら火の適性も五行説としては持つてべきじゃないかと考えたのだが。

「五行説とやらを我は知らぬが火は木を殺す。使えたとしても我は許可しないぞ」

ということらしい。使えないものはしょうがないと割り切るしかないようだ。

現在の魔法修得状況は、水と土がライン。木はスクウェア。火は全く使えない。風はドット。

何とも微妙に優秀なのかどうか理解しかねる内容だ。

何しろ通常の系統魔法は水と土のラインが上限なのだから：

金の系統というのは魔法が存在しないので使えるかどうかの判断も出来ない。

なら前例の無い木系統はどうなのか。という問題があるのだがそこはユッグが魔法を教えてくれた。

ユッグが知っていたわけではなく、魔法を開発してそれを教えてくれたのだ。

ただし、ユッグの考案した魔法は全て私が使う為に開発したので、他のメイジには使えないらしい。

ユッグを正しく認識した人間でないと使えないと言っていた。

そしてユッグの性格のせいで私の使える木の系統魔法は酷い物ばかりになった。

そのいくつかの例を挙げてみよう。

生命略取 《木・木・水》

相手の生命力を奪う種を撃ちだすトライアングルスペル。当たれば相手が死ぬまで生命力を搾り取る。

術者が途中で解除すれば相手が死ぬことも無い。人間相手を死に追いやるのに必要な時間は10秒程度。

生体錬金 《木・土》

通常不可能とされる、生き物に対する錬金。杖が触れた状態ではないと効果は無い。錬金できる鉱物の種類は土系統に順ずる。

当然だが、人体を全て土や青銅などに錬金してしまえば即死する。

人間の全身を一度に錬金する場合は《木・木・土・土》のスクウェアスペルとなる。

活力復元 《木》

精神力を復元する治癒の魔法。これの一番凶悪な点は復元される精神力が使用する精神力の倍以上である事。

活用すれば精神力はまず切れない。気絶状態の人間に使うと気付け効果も得られる。

アナスタシア 《木・水・水》

杖で触れた相手の触覚を奪う。用いる魔力を調整することで部分麻酔から全身麻酔まで可能。

遺憾なことに私の名前的一部と同じ名前。効果時間の調整もある程度可能。全力で使えば相手の生命活動が全て止まる。

デストロイ・レギオン 《木・木・木・木》

術者の周囲半径10メートル内の者の生命を奪い取る。術者も死ぬが私を使う分にはすぐ復活する。

ユッグも同様に不死性を持つ為無効化できる。効果は一瞬である。

酷い内容である。

何しろ攻撃に使えるスペルは基本的に必殺。当たれば相手を確実に殺せる物だらけだ。

極め付けはユッグの力を借りる事で可能なヘキサゴンスペルである。

鉄城の猛吹雪 《木・木・木・水・水・風》

ユッグが足りない木の属性を三つ補う事で使える。

一見ただの青い冷風を起こすだけに見えるが、その風が触れた相手は絶命する。有効距離は5リーグにもなる。

更に10リーグまでなら絶命しないまでも衰弱する効果が得られる。

こんなもの使いたくない。使うときは何時でも協力してやる等と言われたが使ってたまるものか。

これを多用すれば一国を滅ぼすくらいは出来そうだ。国だけじゃなく民も自然も滅ぶだろうが…。

いくらなんでも、こんな物騒な効果の魔法ばかりでは使いづらいことこの上ない。

ユッグにそれを話したところ：

「闘いに用いる魔法であれば、強力であって損はあるまい？」

強力なことはいいいことだ。それはわかるが傍目にも異端であると露見する魔法ばかりなのが問題だ。

その後、一晚中口論になったのは必然だろう。決着は付かなかったのも必然だったと思う：

翌日冷静になって考えると、ユッグは自分が楽しむためにわざと異端に見える魔法を開発したんだと気付いた。

：目指す平穏な生活に、殺し合いなんてものはあっても困るのでこれ以上文句を言ってもしょうがないか。

不老不死である私が戦うときは”殺し合い”にはならず”虐殺”になるわけだが。

衣食住に関しても魔法の修得と同時に大きな変化があった。

鍊金で衣服も何とか作ることができた為、脱野生児を達成。

鍊金が不得意なのでオシャレとは程遠い出来映えだが贅沢は言うまい。

ただ肌触りがお世辞にも良いとは言えないのは問題だ。

家も錬金で無骨なものだが構えることが出来た。

家具も揃えたかったが必要な物が食器と食器棚、机にベッド。それくらいしか無かったので内装も見た目に簡素な家だ。

ただ私の持つ知識を総動員して作った家なので頑丈さは折紙付だ。

食事に関してが一番の問題で魔法の修得と同時に悪化した。

何しろ私は火の魔法が使えない。だからこそ他の方法で火を熾すしかないのだ。

そこで私はもみぎりと呼ばれる火熾しの方法を取っているのだが：正直面倒なので、滅多に火を使わない事にしてる。

こうして生活を改善出来たと、自画自賛に浸っているとユッグが余計な一言を言ってくれた。

「わざわざ土で家を作らずとも、木を使えばもっとマシだろうに。お前の考えは我には理解し難いな」

：その発想は無かった：処理能力の低さが裏目に：
というか、そういうことはさっさと言え。

「わかっていてやってるのかと思ったのだがな。存外にお前の思慮は浅いらしい」

…泣いてなんか無いんだからね。これは心の汗ってやつだよ…

7. 招かれざる客

ユグに水を差され衣食住の改善をするようになってから半年は経った頃、私は現在12歳となった。

体付きも仄かに女性らしさが感じられるようになった。

正確に測ったことが無いからわからないけど身長も150センチほどになったと思う。

せっかくだし魔法の練習にいくつかの家屋やら井戸やら、祈る相手もない教会のようなものやらを作った。

更には野菜が食べたいと思ったので畑を作ってみたり、獣が入り込まないように周囲に柵を立てたりもした。

「気付けば周囲がちょっとした小さな村になっていた。」

：自分でも何を言ってるんだと思うが、事実どっから見ても集落以上の規模の村だ。

深く考えたら負けかもしれないなあ：

「何れここから旅立つというのに態々住むのに村を作るとは、お前と居ると退屈しないな」

…魔法の練習です…と言いつらいのが困る。

途中からやたら楽しくなってきた、事実全く不要な教会も作ったし。

困った事に私はお調子者な性格も持っているのか…

「お前は誰かをここに招いて住まわせるつもりでもあるのか？」

…あるわけないだろう、あくまでここは潜伏場所なわけで…

あれ？人が立ち寄るような場所じゃないのはわかってたけど亜人はここに居ないんだろうか？

「ユッグ、この辺りには亜人とか居ないの？今まで見た事無いのだから」

「居るには居るがな。お前がここに居る限りは寄ってくることもあるまい。

未だに自覚していないようだが、お前は吸血鬼の始祖なのだぞ？
好んで虎を襲う鹿が居ないように、亜人もお前を恐れて近寄らんのだ」

…亜人からも避けられるとか私はどんだけ化け物なんだ。

魔法は確かに化け物染みたモノを使うけどさ。そもそもそれを教えたのはユッグだし。

「私が化け物だって改めて実感したわ。竜でさえ逃げ出しそうね。」

「韻竜ともなれば逃げ出さぬだろうな。亜人どもはお前が化け物だ

からでなく、本能で危険だと勘付いている。

利口な生き物ほど本能は衰えてるものだからこそ、人間社会に溶け込むには何の問題もあるまい」

…竜が逃げ出すのは否定しないのか！

訓練された竜なら大丈夫かな。人間社会に溶け込むのに問題が無いのは助かるな。

貴族の地位を取り戻す手段も今のところ二通りしか考えてない。そのうち一つは人間に警戒されるようではお話にならないからね。

「思索にふけるのは構わぬが、どうやらお客がこちらに向かってきてるぞ」

…客？って現状で考えられる客なんて兄から送られる暗殺者くらいしか思いつかないな

今の私なら、よほどの相手でない限り遅れは取らないつもりだけど、難点が一つ。

相変わらず処理能力が低いから臨機応変ってのが究極的に苦手なんだよねえ。

とりあえずは現状の把握に努めておこう。下手に動くと私じゃ裏目に出る。

「数と特徴を教えてくれると助かるんだけど、わからない？」

「対価を要求して構わぬのなら教えてやろう」

…一瞬イラッときた。けどしょうがないな。ユッグはそういうヤツ

なんだと割り切ろう。

「対価の内容を説明よろしく」

「相手を殺すな。そのほうが面白い展開になりそうだ」

…予想外の対価だなあ。

けど殺さない方法もまあ無いことは無いな。メイジなら精神力を全部奪ってやればいい。

平民の盗賊なんかだった場合でもライン相当の土魔法で対処できそうだし。

「それでいいわ。数と特徴を教えて」

「数は二人だな。一人はメイジのようだが若い。もう一人は子供のようだ。」

ただその後方に複数の人間の気配がする。追われているようだ」

「追っ手らしき人は殺してもいいの？殺さずに複数の人間に対処する器量なんて私は持ってないわよ？」

「殺さずにおくのは最初の二人だけで良い。追っ手のほうはまだ距離がある故にわからぬがメイジのようだな」

…複数のメイジ相手とは、兄相手以来の久々の戦闘にしてはヘヴィーな…

追っ手を何とかするのは構わないのだけど、追われてる二人の対処が問題だな。

異端な魔法連発してる姿なんて見られたら面倒なことになるに決まってるし。

「隠密に最適な魔法の一つでも覚えておけば良かったわ…」

「近いうちに考えておいてやる。今は手持ちの魔法で何とかせよ」

…とりあえずこのまま待機して前二人に接触。

話を聞いた後に追っ手を撃破。

そこまで自分が上手くやれるなんて思えないし見られるのはしょうがないと割り切るっきゃないね。

待ち構えること10分程にして人影が見えてきた。

…ようやく見えてきた。警戒されないようにこちらから話しかけるか。

「御機嫌よう。このような辺鄙な場所にどのような御用かしら？」

<Side 追われているメイジ>

「御機嫌よう。このような辺鄙な場所にどのような御用かしら？」

前方から急に聞こえた透き通るような声にあたしはとっさに反応が
できなかった。

「追われているようだけど、貴方達の素性と追われている理由を話
してもらえる？」

…余裕のある笑み。質素な服装だけど杖も持っている。平民メイジ？
素性は話せない。かといって追っ手とこの娘に挟まれてる状態じ
ゃ交戦する余裕も無い…

「あら、そちらの子はエルフなのね。かといって精霊の気配も感じ
ない…

ハーフエルフってところ？珍しいわね」

…せっかくこんな遠くまで逃げてきたっていうのにここまでか…
この少女の余裕からして、かなり腕には自信がありそうだ。
精神力の尽きかけてるあたし一人じゃ相手にもならないだろうね。

「同種の情けで助けてあげるから、そのメイジは適当に身を守っ
てなさい。

追っ手は何とかしてあげるけど、なるべく戦闘は見ないようにで
きる？」

…一体何を言われたのか、一瞬理解できなかった。
しかし助けてくれるなら恩恵を授かる以外に手は無い。
とっさに声は出なかったがcaろうじて頷くことはできた。

平民メイジらしき少女はそれを見て満足そうに少し微笑むとあたし達の来た道へと走って行った。

「姉さん…?」

…!?

呆けてる場合じゃない!この子は何としても守らないと!

戦闘を見ないようにと、あの少女は言っていた。

…あたしが目を逸らすのは危険すぎる。

せめて、この子からは見えないように。

そう判断するとあたしは鍊金で土の壁を周囲に張り、その壁に空けた穴から来た道を窺うようにして息を潜めた。

…これで私の精神力は空っぽ。あとは成り行きに身を任せるしかないか…

最悪の場合、あたしはどうなろうともこの子だけは逃がせるようにしたいのだけど…

<Side Out>

…物凄く嫌な予感がする。

そもそもハーフェルフなんてそう数が居るはずも無い。

ただ一人だけ心当たりがある…その人物にだけは接触したくなかった。

ティファニア・ウエストウッド

虚無の担い手の一人。モード大公とエルフである妾のシャジャルとの間に出来た子である。

物語の中枢を担う人物の一人で、彼女は何れ騒乱の中心となる事がほぼ確実。

…私としては、絶対に接触したくない人物の最高位に位置する一人だ。

「ユッグ…貴方わかっていて対価を要求したでしょ…」

「当然だ。言ったではないか。面白くなりそうだな」

…この精霊…不死が対価じゃなきゃへし折ってるところだ…

ともあれ、今は追っ手をどうにかする事が最優先。

不死だからって攻撃を受ければ傷もつくし痛いもんは痛い。

それこそ瞬きする間に治るけど、痛いのは嫌なので考えて戦わないと。

不死の対価は私が思っていた以上に、大きな代償となったようだ…

8. はじめての

世の中こんなはずじゃなかった。そんな事ばかりだ。

今の私の心境は、その一言に尽きると思う。

…追っ手は4人か。全員メイジ、豪勢な追っ手だねえ…
痛い思いをせずに始末するのは難しいか。
先制攻撃で二人を始末。最低でも一人は仕留める！

そう戦術を定めた私は、その場から詠唱を開始。
この距離なら吸血鬼で視力が良く、夜目も利く私からは相手が見えても、相手からは視認できていない。

「アースハンド！」

相手の足を絡め取り動きを止める土のドットスペル。

射撃系の魔法では避けられるだろうがこれなら一瞬でも足止めが出来る。

…二人の捕縛に成功した！

すぐ抜け出すだろうけど、足を止めるのは一瞬で十分！

「な！？あのメイジはもう精神力が残っていないのではなかったのか？」

「しかし周囲に敵の気配は無いぞ!? 一体どこから!」

程よく相手は混乱してくれたようなので、続けて射撃の魔法を詠唱。

…必殺の魔法だけど遅効性なのが難点かな。これは。
でも長距離からなら十分に役立つ!

「生命略取!」

ユッグ考案。当たれば死ぬまで生命を搾り取る。迷惑極まり無い人間の天敵とも言える木属性のラインスペル。

本来単発のこの魔法だがスクウェア分の魔力を用いて2発までなら同時に放てる。

それを足止めた二人の敵に向け放つ!

「遠距離からの魔法だ?!? 散開しろ!

このままでは狙い撃ちにされるぞ!」

指揮官らしき追っ手が指示を出す、アースハンドで捕らわれた二人が避けられるわけも無い。

ドン! ドン! と二つの打撃音。ターゲットの二人とも胸に命中した。

…二対一にまで持って来れたけど、今の射撃で凡その位置はバレただろうなあ。

痛いのは嫌だけどこのまま狙撃戦法じゃ倒しきれない自信は無いし。相手がそれを許してくれるわけもないか。

なら接近戦。ああ…本当に痛い嫌なんだけどもなあ…

<Side 部隊長のメイジ>

…ありえない！不可解としか言いようも無い！

暗視の魔法を使っても見えないような距離からの正確な攻撃。

暗殺等の汚れ仕事を引き受けてきた俺以上に手馴れてやがる！

狙撃を受けた二人は、胸を抑えながら呻き声を上げたあと、ゆっくりと倒れた。

ピクリとも動かない事から、もう事切れているのだろう。

見た事も無いような魔法。しかも射撃の飛んできた方向に目を凝らしても敵の姿は見えない。

相手は土のラインメイジ一人。しかも精神力は残り少ない。そのはずだった。

手負いの小娘二人の始末。あとは楽なものだと。そう思っていた。

残る仲間の一人は、今起きた現象を受け入れられず散開に応じたもののうろたえるばかりだ。

…冷静さを欠いているのは俺も同じだが、アイツはもうダメだな。

今は極力動き回って相手に的を絞らせないようにしなければ！

そう思って俺は周囲を警戒しながら出来る限り足を止めずに草むら
を走る。

それから時間にすれば数秒ほどで冷静さを取り戻せた。

…この状況は敵に増援があったとしか考えられんな。

相手の人数はおそらく一人。でなければ初手でこちらは全滅して
たはずだ。

しかしその一人は驚異的な力量を持つ相手。戦慣れしたメイジか。

そこまで考えたときに、後方からドンツ！と鈍い音が聞こえた。

…クソ！やられたか！残るは俺一人！

とにかく今は足を止めずに敵を視認できるように堪えるしかない！

俺は水のライン。暗殺は得意だがお世辞にも戦闘が得意とされる
ようなメイジじゃない。

しかし、敵が見えないのであればどんなメイジでも関係は無い。

水メイジの戦闘方法は基本的の中々近距離での戦闘。

特に森の中のように視界の悪く障害物の多い場所では主力魔法の”
ウォーター・ウィップ”の使い勝手は悪い。

…スリープ・クラウドは射程が短い上に、相手の力量次第じゃ効か
ないから役に立たん。

どうにか敵を発見しないと相手にもならんか…正面！？

正面から飛んできた謎の魔法を間一髪で避ける！

「やっぱ弾速に問題有りね。当たれば必殺なのはいいのだけど」

そこに見た感じ十代前半、まだ成長の途中であろうと思える風貌の少女が杖を構えて立っていた。

幼さを残す風貌ながらも妖艶な雰囲気を出す娘を見て一瞬見とれて動きが取れなかった。

…この少女が敵!?

杖を構えてるということは少なくともあの射撃はこの娘の仕業か。

「お嬢ちゃん。さっきまでの魔法は全部あんたの仕業かい？」

混乱と緊張を紛らわすために、軽口で尋ねてみると、娘は少し微笑んだ。

「アースハンドと射撃に関しての質問ならそうよ。

そのまま遠距離で仕留めたかったのだけど、貴方は優秀だったようで残念だわ」

…なんて娘だ。この状況でも完全に余裕を持ってやがる。

俺は今までもろくに魔法を見せてないはず。俺のクラスなんざお構いなしってことか。

正直、今すぐ逃げ出したい気分だが…それを許してくれるような相手じゃないだろうな。

「色々物思いに耽ってるようだけど、命乞いしても見逃すつもりはないし、交渉にも応じないわ

さっさとかかってきなさい。先手は嬢ってあげるから」

：俺とて男だ。小娘にここまで舐められて引き下がれるほど期用じやねえ。

かといって正面からの攻撃が通用する気が全くしない。

なら背後からの奇襲！

そう判断すると即座に詠唱を開始。

「ウォーター・ウィップ！」

ドットクラスなら相手を打ち据えるだけの鞭だが、ラインともなれば刺す事も可能なほどに強度を増す。

岩を砕くほどの威力は無いが人体を貫く程度ならば可能な、水の数少ない攻撃魔法。

ズンッ！

水の鞭は娘の胸を背後から寸分違わずに貫いた。

：油断大敵って奴だ！如何に強力なメイジでも不意をつかれりやこうなる！

勝利を確信し、魔法を解除。

走り回ったせいで上がった息を整えていると有り得ないものを目にしてしまう。

「背後から胸を一突き…やっぱり痛いわね…」

先ほど胸を貫いたはずの少女が立ったまま、さも致命傷でなかったかのように言葉を発した。

「思ったより痛くは無かったけど、慣れたくないわね。これ」

更に続く少女の言葉に最早何も反応できず、男はただただ混乱しろたえるだけとなった。

だから、その少女が悠然と近づき、杖を男の胸に当てても、一歩たりとも動けなかったのも必然と言えた。

「生体錬金」

それが男の最期に聞いた言葉だった…

<Side Out>

「我の声が聞こえぬ相手にしてみれば、さぞお前に恐怖しただろう

な」

「死ぬ相手にわざわざ説明するなんて無駄でしょう。

それより、痛みをそこまで感じなかったのも貴方との契約のせい？」

…胸を貫かれたにしては痛覚はそれほどでもなかった。

通常であれば声も出せないほどだったはずなんだけど…

「それは始祖の血のせいではないか？我が与えたのは高速自動復元のみだ。

そもそも吸血鬼の始祖は元々強力な自然治癒力を備えた種族なのだ。それに耐えうるように出来ていても不思議ではあるまい」

…なるほど、痛覚が原因で精神に影響を及ぼすような事が無いようにリミッターがついてるようなものかな。

にしても、やっぱり痛いものは痛い。出来る頃なら以後勘弁願いたい。

今回は不死性と痛覚の確認のために態と敵の前に姿を見せ攻撃を受けてみたが。

今後は一切こんな真似はしたくない。そう思うんだけど…

相手を殺さずに決着させるならこれで恐怖を煽って発狂させるのも有りかなあ？

「それにしても、これからあの二人とお話するって考えると、ストレスで胃に穴が開きそうね…」

本当に世の中こんなはずじゃなかった事ばかり…それは彼女達も同じか…

9. 妖精

突然ですが、私は今人生の岐路に立っています。

私の寝泊りしている小屋。テーブルを挟んで相對する二人の少女。

正面に座っているのは、こちらを警戒するように睨む二十歳前後の鮮やかな緑の髪の女性。

そしてその隣にもう一人、少し潤んだ瞳でこちらの様子を窺う耳の長い金髪の美少女。

もうお分かりでしょうが、物語の中樞を担う二人である。

…どう対応すりゃいいのかわからん…

その一、全てを知った風を装う。

…これをやると彼女達を保護する必要が出てきそう。

その二、何も知らぬ振りをしてお別れする。

…無理、遭遇したときにハーフエルフとか発言しちゃったし。

その三、全力で逃げる。

…これが最有力。なんだけど二人の少女を見捨てるなんて良心の呵責が…

嘘です。いざとなれば私はやれる人間。だけどここで恨みを買うのは後々困りそう。

…その一しか無いかな。

そもそも私は考えて行動するのがどうにも裏目に出る傾向がある。なら最初に思いついた案で行動してみるのもいいかも知んないしね。

「色々警戒するのはしょうがないけど、黙ってこっちを見るくらいなら質問でも何でもしてくれる？」

答えられる範囲でなら、嘘偽り無く答えてあげるわ」

そう言うと、緑髪の少女は…もうこれ面倒だし本名でいいか…マチルダは睨む目を更にきつく警戒心を強めた。

ティファニアはビクツと体を跳ね上げたあとにマチルダの影に隠れた。

ちょっと傷ついた…。

…私ってそんな怖い風貌してる？

水面などに映る自分の姿を見る限り、我ながら美少女だと思うんだけどな…

「アンタ何者だい？追っ手はどうなった？あたし達をどうするつもり？」

短く質問三連発。めちゃくちゃ警戒されてるのが良く分かった。

「私はここに隠居してる平民メイジ。名前はリース。

追っ手は全て片付けたわ。別に二人をどうしようなんて思っ
てないわよ。

言ったでしょう。同種の情けだって」

こちらも出来る限り簡潔に質問に答えてやる。

出来る限り警戒を解いて貰わないと建設的な話の一つも出来やしな
いだろうし。

「こんな場所で隠居してるなんて怪しすぎるね。没落貴族かい？
それと同種ってのも意味がわからないね」

「没落したわけじゃなくて自分一人で家を出たの。兄に暗殺されそ
うになったから。

同種ってのは人間と亜人のハーフって意味よ。私はエルフとのハ
ーフじゃないけど混じり物って意味じゃ同種でしょう？」

…このまま質疑応答を続けると長くなりそうだなあ…
けど他にいい方法は思いつかないし、どうしたものか…

「家を出る前の名前は教えて貰えないのかい？亜人と貴族のハーフ
が他に居るなんて話聞いたことも無い」

…正直意外だ。他に居るなんて聞いたことがない？

つまり、兄も父も私の存在を公開していないということになる。家名に傷がつくから秘匿したのか？今まで追っ手の一人も来た事がないのはそういうことか。

兄はもつと激情家に見えたのだが、そうでもないってことか。

兄があの時亡くなった可能性は…あの程度じゃ無いか。他の暗殺者の中には水メイジも居ただろうし。

…っと考えるのは後にしよう。今は質問に答えてあげないと。

「リース・アナスタシア。ノーザンブランド伯爵の妾の子よ。

生憎、家を出てからはずっとここに住んでるから、実家はどんなったのか知らないわ」

その答えを聞くと、マチルダは何か考え込んでいる様子だ。

ティファニアは多少まだ怯えてるようだが、最初よりは緊張も解けたようで、こちらを窺う目は涙を溜めた様子も無い。

その様子を眺めること数分が経過した頃。

沈黙を破ったのは意外にもティファニアだった。

「あの…助けていただいてありがとうございます。それと、怯えたりしてごめんなさい」

発せられた言葉の内容もまた意外だった。

ただ驚く内容だった言葉は私にとって何か心地よい気分をもたらした。

それが何なのかは今の私にはまだ理解が及ばないらしい。

「相手が怯えるのは私にとって当然だから気にしないでいいわよ。貴方にとってもそうなのでしょう？」

お礼は有り難く受け取っておくわ」

その返答を受けて何かに気付いたように俯いていたマチルダが顔を上げて質問をしてきた。

「アンタ：何のハーフだい？」

その質問は私にとっては結構キツイものがある。

：何しろ吸血鬼っていうのは血を吸うものだって一般的に認識されてるしなあ。

血は吸わないって言っても警戒が完全に解けてない今は全く信じてもらえないだろう。

かといって、この疑問を持った時点で答えなくても警戒されたままなのは同じ。

なら、包み隠さず答えたほうが可能性は残るかね。

「……吸血鬼よ。母は特異な血を吸わない吸血鬼だったわ。私もそれを引き継いで血を吸わない吸血鬼のだけどね」

：マチルダさんが物凄い勢いでひいてる。そりゃ当然か…。

これは答えたのは失敗だったか？
ん？ティファニアの態度は変わってないな。どうしてだろ？
とりあえず警戒を解くのにフォロー入れておこう。

「別に貴方達の血を吸ったりなんてしないから安心していいわよ？
そもそも血なんて美味しいもんじゃないでしょうし…吸った事無いから味なんて知らないけどね」

「血を吸わない吸血鬼なんて居るんですね！エルフにも色々な人が居るのかしら？」

ティファニアが目を輝かせながら感動？している。

…どういことなの…

この子の思考回路が理解できん。頭がお花畑なのか？

エルフについての知識は多少なりともあるからとりあえず答えておくか。

「エルフにも色々居るわよ。先住魔法を殆ど使わない武人のエルフとか。

貴族や平民のことを熱心に研究してるエルフだって居るしね。

人間に恋するエルフだって居るのだから当然でしょう？」

ティファニアは私の答えに満足したのか目を輝かせたまま大きく首を振って頷いている。

…可愛いなあ。私もこれくらい愛嬌があればここまで警戒される事も無かったのだろうか。

ふとマチルダに目をやると、どうやら気分が落ち着いた様子だ。

血を吸わない吸血鬼なんて眉唾なものを信じる気にでもなったのだろうか。

…自分で眉唾なんて思っちゃうくらい信じられない存在なのが困るところだ…

始祖なんて言われるくらいだから、世界中探しても私しか居ないのかな？

「とりあえず、もう夜も遅いし二人とも疲れてるでしょう。

この家を自由に使っていいから今日のところは休んだらどう？」

「アンタはどうするのさ」

「また追っ手が来ても面倒だから周囲を警戒しておくわ。

ああ、私は種族の特性で睡眠を取る必要は大して無いから気にしないでもいいわ」

そう言うことやはりまだマチルダは警戒しているようで答えを出しかねている様子だ。

「そんなに私が怖いなら二人で交代で休むなりすればいいでしょう…
二人してそんな疲れた顔してたらこっちが気になってしょうがないの」

二人はそれを聞いて何とか休んでくれるらしい。
ティファニアがベッドに入ると同時に私は外に出て、周囲の警戒を始める事にした。

…これからどうしたものかなあ。

明日にでも二人を落着かせたらアルビオンを出るかね。

何しろこれ以上ここに居たら物語に巻き込まれるのがほぼ確定しそうだ。

貴族になるための手段。アルビオンでの戦功を上げるという案は無理になったし。

そうなるともう一つの手段のために早いうちにトリステインに行かないと…

冷静になって考えると、人生の選択また間違えたかも知れないなあ…

10. 前進の為の逃亡

私にとって死亡フラグである二人が村に迷い込んだ翌昼。
漸くマチルダが目を覚ました。

「あー…とりあえず今どういう状況か説明してもらえるかい？」

開口一番質問が飛んできた。

マチルダは昨日から質問ばかりだ。

…生前の記憶によるとこういう人のことを”教えて君”って呼ぶんだっけ。

妙な事を考えてると私の代わりにテファが答えてくれた。

「リースさんと一緒にご飯つくってるの。」

姉さんもお腹すいたでしょう？昨日から何も食べてないから」

…その答えは間違っではないと思うけどね。

だけど、そういうのが聞きたいんじゃないだろう。

マチルダさんはどうして私とテファが仲良くしてるかを知りたいんだと思うよ？

「朝も一緒にテファと料理して食べたのよ。」

それから他愛も無い話をしつつ、次第に打ち解けたの」

無意識かわざとか、マチルダはしきりに自分の首に手をつつ、テフ

アの首元を凝視してる。

…吸わないって散々言ったのに効果は薄かったか。

「吸って欲しかったの？ そうなら早く言ってくれればいいのに」

…無論頼まれたって血なんか吸わない。だって美味しいわけないだろうさ。

血液が糖分で出来た人間なら考えるかもしれないが…
私は正直甘い物好きなのだよ。

「ああ…いやそういうつもりじゃなくて、つい…」

…おお？ 少し気弱な反応？ ある程度信用してくれたかな？
なんて思ったらテファが睨んでるからか…
マチルダさんの弱点がテファなのはこの頃から同じらしいな。

「とりあえず顔洗ってきたら？ 酷い顔してるわ。
私は寝不足です。って主張してるみたい」

…私って奴はたまに無意識に皮肉を飛ばすらしい。
そういえば今までも何度も意識せずに皮肉を飛ばしてたような気がするな。

マチルダは顔を真っ赤にして小屋から出て行った。

…水場の位置わからんだろうに…

しょうがないから付いて行ってあげますかね。

「テファ。私はマチルダさんを水場に案内するから、あとお願いするわね」

「分かったわ。姉さんをよろしくね。まだちょっと緊張してるみたいだから」

小屋の外に出ると周囲をキョロキョロと見回すマチルダをすぐさま発見。

…寝不足で目つきが悪い状態だと獲物を探すハンターみたいだ。いかんいかん。思考の中でまで皮肉っぽくなってる。

「マチルダさん。水場の位置わからないでしょう？案内するからついてきて」

声をかけると驚いた様子でこちらを見るが、それを無視して井戸に向けて歩き出す。

「アンタ、本当に血を吸わないのかい？
血を吸わない吸血鬼なんて聞いたことが無いんだけど？」

「心配なのは解るけど、どうせ私は今晚ここを出るから気にするだけ損よ？」

：今マチルダさんは物凄く驚いた表情してるだろうなあ。

けど振り向かない。その様子を目にしたら余計な一言を言ってしまうだろうし。

正直マチルダさんって弄り甲斐がある人だと思う。

私の中でマチルダ株が急上昇中である。

「出てくって、もしかしてあたし達がここに来たからかい？」

元々近いうちに出るつもりだったので、二人は出る事には関係無い。

：確かに二人が来た事で予定が早まったのは事実だけどね。

それはアルビオンで貴族になるか、トリステインで貴族になるかを決めかねていたのが原因だ。

二人が来たことでアルビオン案が消えたので、行き先が絞られただけで。

「二人のせいじゃ無いわ。元々旅に出る予定だったのよ」

その後は特に言葉を交わすことなく水場に案内を終え、二人で小屋に戻った。

食事を済ませると、昨夜と違って穏便に話を進めた。

重要な話には極力触れないように注意しながら。結果的に私についての話が殆どだった。

…余計な情報を二人に与えて、物語に巻き込まれるのは絶対に避けなきゃいかん。

本来なら今すぐにでも逃げ出したいが、恨みを買うような真似も出来ないしな…

等と考えつつも二人との話を続けた。

他の住人は何処に行ったのかと聞かれたので、魔法の練習してたら何時の間にか村が出来たと答えてやると、二人して「魔法の練習って色々あるのね」とか「アンタ頭おかしいのかい？」とか…

少し目頭が熱くなった。テファは良い娘だ。マチルダ株は大幅に下落した。

魔法の腕前について、私が水と土のラインである事を話せば、マチルダは土のライン。テファは魔法を上手く扱えないと教えてもらったり。

見た目少女だが吸血鬼との事で私がとんでもない高齢だと思われてたのは少しショックだった。

まだ12歳だと話すとテファはともかくマチルダはありえないといった感想が顔に出ていた。

それを指摘してやると、12歳でラインメイジだというのに驚いたと言ってたが、目が泳いでた。

：確かに吸血鬼ってのは見た目の数倍の年齢だっというのが普通だ
けどさ：

私だって一端のレディ（笑）なわけで、年齢を高く見られれば凹
むのだよ？

その後も様々な話をして、マチルダとも結構に打ち解けた。

私の出て行ったあとは好きにここで暮らしていいと伝えたと、何か
お礼をしたいとしきりにお願いされたので：

「それならもしもこの先、何処かで私を見かけても見知らぬ振りを
してくれる？」

：こう言っておけば以後巻き込まれる可能性は一気に下がるはず！
我ながら素晴らしい機転だ。

誰が好き好んで大型地雷な担い手と関わるかつ！

ユグが小声で「さすがにいい性格しているな」等と言ってた。

：お前生きてたのか：

いや冗談だが、他に人が居るときは返答できんからもう少し黙っ
ててくれ。

マチルダは何か納得したような表情をして、暗に肯定の意を示して
くれた。

テファは目に涙を溜めて、納得できていないようだったが何とか頷

いては貰えた。

…悪い事言った気になってくるな。

私にも一応罪悪感とか善意とか。そういう気持ちはあるらしい。

…だがしかし…平穏な生活は全てに優先するのだ！

その後は真面目なようで、そうでもないような。そんな会話をしつつ夜を待った。

テファが寝静まり、マチルダも舟を漕ぎはじめた頃。
私はトリステインに向かうべく村を出ることにした。

「今度会ったときは他人って約束だから、今のうちに言っとくよ。
ありがとう世話になった」

マチルダのデレである。

皮肉を飛ばそうかとしたが、何とか思い留まった。

…余計な事を言うのと再会フラグが立ちそうだ…

あくまで淡白に、そして感謝もほどほど、遺恨は残さない…

そういう意味では私は上手くやったはず！

敢えて何も言わずにそのまま私は村を出た。

：目指すはトリスティン。目的は貴族になること。待ってる私の平穏な生活。

10. 前進の為の逃亡（後書き）

※作者はテファの扱いが苦手です。

10. Out Side — すれ違う想い

<Side マチルダ>

最初に出会った時は、怪しい奴だと思った。

その後、色々質問を飛ばし答えてもらい、更に危険な奴だと思った。

追っ手の4人。しかも素人じゃない暗殺に慣れたメイジが4人。

それを片付けたと簡単に言い、目立った傷は無く衣服の一部が破れた程度だった。

少なくとも荒事に慣れた風、暗殺者をなんでも無いように振舞う豪胆さ。

極めつけは吸血鬼と貴族のハーフだって言うじゃないか。

それはもう怪しいなんでもものじゃない。危険なんて言葉じゃ足りないような奴だと思った。

リース・アナスタシア。

ノーザンバランド伯爵の妾の子。

ノーザンバランド伯爵には一度だけ会ったことがある。

人の良さそうな政争に明け暮れるような貴族とは思えない印象だった。

親しく会話したわけでもなく簡単な挨拶をしたことがあるだけだか

ら詳しくは知らない。

けどその伯爵の娘とは思えないほどに、この娘の無愛想で無表情だった。

そう思って警戒しつつもテファも交えて3人で会話をしてみたはいけど…

この少女は、外見や印象と性格が噛み合っていないんだと気付いた。

何しろ私達についての質問はしない。色々聞きたいだろうに関心の無いふりをする。

自身については殆ど質問に答えてくれる。境遇を聞けば話したいと思うような内容とはとても思えなかった。

旅に出ると言うからあたし達のせいかと聞けばそうではないという。

最初はそれを鵜呑みにしたけれど、村を丸ごと自由に使っていると言われればさすがに私も気付く。

魔法の練習で偶然出来た村だなんて言うけど、自分で作った物に愛着を持たないわけがない。

あたしとテファのために、この少女は村を出て行くのだろう。そう考えると申し訳ない気持ちと感謝で胸がいっぱいになった。

何かお礼をさせて欲しいと頼んでみれば、今後会うことがあっても他人のふりをしてくれ。などと言う。

それも多分自分の為だけじゃなくあたし達を思っただけのお願いだろう。

この少女の本質はテファよりも優しい。

それが私から見た少女の印象だった。

そうやって認識を改めつつ、警戒を解いて会話を続けていると妙な話の流れになった。

「どうして皆、傷つけあうのを止めることができないの？

お父様やお母様が誰かを傷つけたわけじゃないのに……。どうしてこんな事になったのか私にはわからないわ！」

この奇妙な空気に当てられてあたしは失念していた。

今一番苦しいはずのテファがどうしてここまで明るく振舞っていたのか。

それは溢れ出す感情を押し込めるためだ。

…そんなの考えればすぐ分かりそうなものだったのに！

テファの激情とも言える感情の吐露に私はどうしていいかわからなかった。

けれど、リースが今まで通りに平静な声で答える。

「あるところに、もの凄く仲が悪く何かがあればすぐ喧嘩をするAさんとBさんが居ました。

AさんもBさんもお互いが大嫌いで、周りの皆は二人の仲が良くなればいいのにと何時も思っていました」

急な語りと、脈略の無い話にあたしもテファも呆然と聞くしかなかった。

「さて、この二人の喧嘩をやめさせるにはどうしたらいいでしょう？
テファ、貴方ならどうするかしら？」

少し経ってからテファは少し掠れた声で答えた。

「話し合えばいい…と思うわ。それを続ければ何時か分かり合える
と思うから…」

「間違いではないわ。だけど時間がかかりすぎる。
仲直りするまで二人は何度も喧嘩をするでしょうし解決するとは
限らない」

「ならどうすればいいの？リースさんならどうするの？」

今のテファはあたしが知る限りで過去最も感情的になってると見て
思った。

目に涙を溜めて、悲しそうな顔でリースを糾弾するように問う。

あたしはそんなテファにかける言葉が全く見つからない。

それにあたしにとっても話しの内容は興味深い物だったので口を出さずに黙る。

「その一、AさんとBさんの事が大嫌いな喧嘩の強いCさんを連れてくる。

AさんとBさんはCさんに一方的にやられたくないから、次第に協力するようになる。

そうすればAさんとBさんの喧嘩は無くなると思わない？」

「でもそれだと喧嘩は無くないわ。相手が変わっただけで…」

そう、確かにそれだとAさんとBさんの喧嘩は無くなって、相手がCさんになっただけ。

「そうね。だからその二、AさんとBさんが喧嘩をした時に二人をとっちめるDさんを連れてくる。

喧嘩をするとDさんが来るからDさんを恐れて二人は喧嘩をしなくなる」

…確かにそれは理想的な答えに聞こえる。

けどその関係はまるで…

「マチルダさんは気付いたわね。これは王家と貴族。貴族と平民の関係よ。司法とも言うわね。

貴族のAさんBさんに対して王家のDさん。平民のAさんBさん

に対して貴族のDさんといった関係ね」

「この方法は、理想的に聞こえたでしょう？」

でもこれにも問題があるわ。Dさんが喧嘩をはじめると途端にCさんになって誰も止められない。

貴方達に降りかかった災いは正にこれなのでしょ？」

確かにリースの言うとおり。あたし達を襲った不幸は王家の暴力。誰にも止める事が出来なかった一方的なDさんの暴走だ。

それこそがテファを襲った不幸の理由。テファの知りたかった理由。

「テファが本当の意味で知りたいのは、Dさんの暴走を止める方法。若しくは、Dさんを暴走させない方法じゃないかしら？」

テファは啞然としたまま何も言葉が出せないようだ。

あたしも言葉が見つからない状態ではあったが、なんとか質問を搾り出す事ができた。

「リースにはその方法をわかるのかい？」

その質問に対し、リースは目を細めて今まで違い威圧的な雰囲気で口を開いた。

「考えた事も無いわ。
それを考えるのはその方法を求める人。他人に答えを求めるもの
じゃないわ」

テファはそれを聞くと少し考え込んだあと立ち直った様子で、未だ
目に涙を溜めながらもハッキリと答えた。

「私はどうしても争いの無い世界、皆が笑って暮らせる世界が欲しい。
い。

だからこれから頑張って考える。悲しんでるだけじゃ何にもならないもの！」

あたしには今のテファが輝いて見えた。こんな不幸の中にあってこれほどまでに強くある妹分が眩しく見えた。

それを諭したリースはさっきの威圧的な雰囲気はもう無く、ただやさしく微笑の表情でテファを見ていた。

今のあたしには二人は眩しすぎる。純粹な優しさが酷く脆く見えた
テファは想像以上の強さを持っていた。

リースに至っては私達に無償の愛を分け与え、強さを与えてくれた
聖女のようなだと思った。

あたしには目の前の二人のように気高く在ることは出来ない。
ならせめて、テファが気高くある事を守護する騎士になろう。そう
静かに決意した。

<Side Out>

…あぶな！急にテファが妙な事言うから、貴族派がどうか言いそうになった！

なんとか上手く話を逸らして例え話で落ち着かせる事が出来たのは行幸だ。

自分で自分を褒めてやりたいね。

どうすりゃ争い無くなるかって質問には政教分離とか民主主義とか言いそうになった。

ブリミル信仰に真っ向から喧嘩売るとか冗談にもならん。ただでさえ存在が喧嘩売ってるようなものだしね。

テファの決意的なものから危険な臭いがしたけど…大丈夫だよな？

10. Out Side — すれ違う想い（後書き）

繰り返します。作者はテファの扱いが苦手です。

1. 聖女ローラ（前書き）

ここから原作開始まで非常に展開が早くなる予定です

1. 聖女ローラ

トリステイン王国に来てから1年が経過。私も13歳となりました。

アルビオン出国とトリステイン入国はあっさりと達成。正直検閲甘い。というか検閲が無かった。

それが理由で港町の治安が悪いんだってことに領主にはわかっていないらしい。

トリステインに入国してからは、私は医療メイジとしての名を上げる為に旅暮らしをしている。

ちなみに”ローラ”という偽名を使っている。さすがに私も大らかに本名を名乗るほど間抜けじゃない。

平民メイジが貴族になるための手段は多くない。

功績を上げて御家再興を王家に認めてもらう。

…実家は潰れて無いので不許可。

シュヴァリエを王家から授かる。

…アルビオンには実家があるので無理。トリステインだと軍役が条件なので却下。

といった感じで残された方法は一つしか思いつかない。

王家が有力貴族に取り入って超法規的措置で養子にしてみよう。

王家に取り入るのは平民では無理があるので有力貴族に取り入る事になるのだが：

それも普通の方法では到底無理な話である。

しかし私には一つだけ心当たりがあった。

ラ・ヴァリエール公爵家である。

次女のカトレア嬢は生まれながらに奇病に侵され、それが侯爵夫妻を悩ませている。

私の知る物語の通りの状況であるかどうかは旅をしつつ情報を集める事で裏付けが取れた。

私の得た情報は以下の通りである。

カトレア嬢は現在21歳。父であるラ・ヴァリエール公爵からラ・フォンティーヌの領地を与えられている。

幼い頃から家を出たことも無く、ラ・フォンティーヌの領主ではあるが領地経営には直接関与していない。

学院に通うことは無かったが、メイジとして優秀であり、聡明で穏やかな性格。美人である。

ほぼ全てが、私の知る生前の知識と符合する。

彼女の治療を成し遂げれば、その対価に公爵家から莫大な恩恵を受ける事が可能。

つまりは貴族の養子に迎え入れてもらう事も交渉次第では可能だと思ふ。

しかしながら、ラ・ヴァリエール公爵家の養子にはならない事に注意が必要だ。

公爵家ともなれば養子を取る事は婚姻以外の手段では到底不可能だろう。その点は安心してゐる。

つまり自然と養子になるのであれば公爵家に縁のある家になる。

…何か見落としてる気もするけど大丈夫…きっと大丈夫…
でも今までそう思って大丈夫だった事なんて殆ど無いんだよね…

といった感じで、私は公爵家の目に留まる程度に医療メイジとして名を上げる必要があるのだ。

しかし貴族の治療を無闇にすると、それぞれの貴族付きの医療メイジから恨みを買ってしまう。

だから自然と平民の治療をしつつ旅をする事になるのだが…

平民は基本的にメイジに治療を頼めるほど裕福では無い。
だから私は治療の報酬にお金を求めず現物で貰っている。
主に野菜や肉などの食材だ。それ以外の物だと旅の邪魔になるので
殆ど断っている。

そして、ありがたいけど物凄く迷惑なあだ名がついた。

” 聖女 ”

何の冗談だろうか。

しかし噂は無常にも広がり、誰しもが認める聖女様となりました。

人によっては始祖の御使いなんて呼んでる。ロマリアさんの反応が
怖すぎるから勘弁して欲しい。

ユッグなんかはこのあだ名を聞いて大爆笑してた。

「お前が聖女だと？お前が？人の世に於いてこれ以上無い悪女のお
前が聖女だとは！」

とか、やたらめったら笑いながら私を扱き下ろしていた。

：ただ平穩に暮らしたいと願う一人の少女に対して悪女呼ばわりと
は酷いと思う：

私って悪女なのかね。いやでも世間一般で私は聖女なわけだし。

人間、自分のことは自分が一番分らない。というのは言い得て妙なのかも知れないな。

聖女なんてあだ名は完全に不意打ちだったが、噂に関して私の思惑通りになった部分もある。治癒に関することだ。

”聖女に治せぬ怪我はあれども、病はその全てを払う”

治せない怪我はあるけど、病気なら何でも治しちゃいますよ。って意味だ。

これは奇病を患っているカトレア嬢を狙い撃ちするために故意に行動した結果である。

怪我に関しては何となく治さなかった事が幾度となくある。

それが人同士で争った結果の傷もその一つ。これは意地悪で治さなかったわけじゃない。

下手に治すと、争いの相手から恨みを買うだろうと考えた結果、治さなかった。

つまり意地悪で治さなかったわけではなく、打算によって不利益を回避するために治さなかったのだ。

私は聖女じゃないし、聖人君子でもない。

ただの平穩を望む少女なのだから自分を犠牲にしてまで治癒はしない。

それ以外でも自分で故意につけた傷だったり、体の一部を失うような怪我也治さなかった。

自虐的な人をいくら治癒してもまた自分に傷をつけるから治すだけ無駄だと思う。

体の一部を失う怪我っていうのは治療するなら代わりを用意するしかない。

代わりを用意するのは手間と金銭がかかるので私には無理だ。外法でいいなら可能だが…。

そういった意味では病においても治すと厄介な事になりそうな場合もあった。

毒物による症状である。これは毒を盛った相手が居るかもしれない。という厄介事を招きそうなものだ。

自分の名声の為に治療はしたが、それ以降しばらく遺恨を残したかもしれないと怯えたのはいい思い出だ。

幸い平民相手の医療なので、毒物による症状はそこまで多くなかったし、

たまにあったとしても毒を持つ自然物を摂取したとかそういう物が多かった。

人によって調合された毒薬による症状の患者は今のところ二人だけだったし、治療のあと誰かに恨まれたような気配も無い。

等と、旅をはじめてからの経緯を思い返しているのには理由がある。

今、私はラ・ヴァリエール公爵家のお城に向かう馬車に揺られているのだ。

目の前には何やら訝しげにこちらの様子を窺う金髪で長身の美人さん。

：確かにラ・ヴァリエール公爵家から使者が来るのは待ち望んでいた事だけだね：

けどまさか長女様が直接来るなんて想像できるわけないよねえ：

エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール

しかし長女で助かった。三女が来たら私は確実に逃げ出してただろう：

1. before 治療行脚中にて

<Side 村娘>

今、村の集会場に噂の聖女様が来てるって大人達は騒いでた。

私は聖女様にどうしても会いたくて集会場まで走った。

：聖女様が治療を始めるのは陽が落ちてからだって言ってたから、
今行けばお話できるかもしれない！

そう思って一目散に集会場まで走った。

大きいけれど立派とは言えない簡素な木造の集会場。

固定化もかかっておらず、重ねた年月によってキィキィと音を立てる扉を思い切り良く押した。

バンッ！

思ったより大きな音が立ったらしく、中に居た私と同じくらいの年齢に見える少女が目を大きく見開いてこちらを見ていた。

「急患にしては元気な娘ね。私にどんな御用かしら？」

光を反射してキラキラと光る銀色の長い髪。

私の視線を捕まえて離さない茜色の大きな瞳。

絹のように滑らかで真つ白な肌。

そこには私が想像していた通りの聖女様が居た。

思わず見惚れて固まっていると聖女様から再び呼びかけられた。

「そんなところで固まってないで、用があるなら話してくれないかしら？」

その声を聞いて我に返ってあわてて話しかけた。

「あああああの。せ、聖女様でいらっしゃいますか？」

「悪いけどそう呼ばれるのは好きじゃないの。ローラって呼んでくれる？」

名前で呼ぶなんて恐れ多いとも思ったけれど、御本人が言うのであればと思い名前で呼ぶ事にした。

「では、あの、その、ローラ様。と」

「様は余計だけどまあいいわ。それで？貴女は何か御用があつて来たのでしょうか？」

「せ、聖女：じゃなくてローラ様がいらっしやると聞いて：それで、あの、お話をしてみたいと思って来ました」

「私から貴女に話す事なんて無いわ。

だから貴女は自由に話しなさい。返事と返答はするから」

正直変わった人だな。と思った。

思っていたような人じゃないみたいだけど、悪い人じゃないと思う。

だから私は気になってた事を矢継早に質問していった。

どうして平民を治療しながら旅をしているのか。

目的があってそのために必要だから。

食材を渡すだけで治療してくれるのは何故なのか。

美味しい物が食べたいから。

どんな病気でも治せるというのは本当か。

少なくとも今まで治せなかった病気は無い。

始祖の御使いというのは本当なのか。

誰かが噂と一緒に流した出鱈目。

ガシャン！と私の抱いていた幻想が砕けた音が聞こえた。

想像していたものと、全然、全く、完全に違う。

…でも悪い人じゃないと思う。

どうしてこの人が聖女様なんて言われてるんだろう。

更に聞きたい事が増えた。

だからそのあとも暫く私は止むこと無く質問を続けた。

それこそ好きな食べ物だとか、好きな動物だとか他愛も無い質問もした。

そして色々なことがわかった。

聖女というのは、周りの人が勝手に言い出した事でローラ様はその呼び名が凄く嫌だってこと。

お金を貰っても使う予定が無いし、物を貰っても持ち歩くのが大変だから食材を貰ってること。

貰った食材はその日のうちに全部調理して村の皆に配ってるのは持っていくのが大変だからってこと。

魔法のことを褒めると、美味しい野菜の一つも作れない不便なものだと言ってた。

美しい容姿を褒めると、私に言われてもあまり嬉しく無いと言ってた。

噂は当てにならないと実感した。

ローラ様が聖女と呼ばれるような事をしているのは全て理由があった。

だけど私達平民にとっては、どんな理由があっても微々たる報酬で治療してくれる人。

私にとっては、忙しそうに治療の準備をしつつも話に付き合ってくれた人。

そこまで考えが至った私はこう結論した。

優しくないかもしれない。欲深い人かもしれない。素っ気無い人だとも思う。

それでもやっぱりこの人は聖女なんだ。そう純粹に思えた。

「お話に付き合ってくれてありがとうございました。

ローラ様は嫌がるかも知れませんが、やっぱりローラ様は聖女様です」

そう告げ、立ち去ろうとすると声をかけられた。

「私から貴女に最初で最後の質問。貴女のお名前は？」

ローラ様から話しかけてくれた事を嬉しくて、今までより大きな声で返事をした。

「シエスタです！」

<Side Out>

シエスタが出て行ってから私は一人物凄い勢いで落ち込んだ。

：いやいやいや、まさかそんなの予想できるわけじゃないじゃないか。
っていうかタルブに来たなら警戒しろよ私。

そもそもここってタルブだったのか。シエスタっていう地雷は予想できただろう。

落ち着け私。落ち着くんのだ：

そもそも今回、少女との無益とも思える会話に応えたのは自分が聖女なんて物じゃないと証明したかったからだ。

いきなり純真無垢に見える少女が聖女様なんて言葉にするもんだから、反抗してやろうと思った小さな出来心。

事の発端は、”凄腕の旅の医療メイジ”という噂を流すはずが、
優しい治癒の聖女様”になってしまったことが原因。

全くもって計画とは違う結果になってしまったので、私としては物凄く不満だったのだ。

少女と話をしている途中までは良かった。
目に見えて、現実によって理想を打ち碎かれ複雑な表情をする少女が見れて正直楽しかった。

そこで満足した私は、医療活動のための準備をしつつ少女の他愛も無い質問に答えてやってた。

そして最後に少女がとんでも無い発言をしたので私は戸惑ってしまった。

やっぱり貴女様は聖女様です。

幻滅したはずだ。理想が裏切られたはずだ。いっそ罵ってくれてよかったくらいの感触だったはずだ。

それが最後の最後で聖女様です。などと言われては納得いかない。

だからあとで呪ってやろうか等と思いつつ名前を聞いた。

もちろん本気で呪うつもりなどなかったし、今になって思えば私は少女に最後の最後で興味を持ったのだろう。

そして、私は実は大型地雷でした。と言われた。

：私のこと忘れてくれると助かるんだけど、絶対覚えられただろうなあ…

偽名だから名前が知られるのは構わないけどねえ…

テファには会うし、シエスタには会うしで、ユッグと会ってから碌な事が起きない。

そもそもどっちもユッグが切欠なんだよな。

助けろって言うから助けた相手がテファだったり…

貴族になれっていうから色々手を尽くしてみたら今度はシエスタだ…

そしてラ・ヴァリエール公爵と次女のカトレア嬢にも会うつもりだ。

順調に巻き込まれてないか？私…

私は、以後タルブには近寄らないようにしようと思い決めた。

…トリスタニアにも近づかないようにしたほうがいいな。

あそこには姫様以外にも物語に登場する人物が集中してるし…

アニエス、リッシュモン、ワルド、マザリーニ、スカロン、ジェシカ…

私にとってトリスタニアとは魔の巣窟としか思えん…

生まれてから今まで、ずっと後悔と反省に塗れた人生送ってるな…

2. 馬車内の空気が悪い

私は今公爵家に向かう馬車の中で揺られている。

長女エレオノールの視線が私に突き刺さっている。
不機嫌です。と表情が語っている。

黙っていてもしょうがないと思ったのか、エレオノールは私にいくつも質問をしてきた。

私は律儀にその全てを正直に答えてやるが、ちゃんと答えてるのに表情は変わらず不機嫌のままだ。

「アナタそれでよく聖女なんて呼ばれてるわね…」

「私を良く知る人によれば、悪女らしいわ」

大体、自分の事を”聖女”なんて思ったことも言ったことも無い。
冗談にもなっていない噂だ。

自分で”聖女”なんて柄じゃないってのは良くわかってるだけに、

その呼び名は不快極まりない。
”悪女”と呼ばれるのも嫌だけど…。

「欲が少ないのは事実みたいだけど、噂なんて当てにならないって
良くわかったわ」

…私より欲深い人間が居るのなら連れてきて欲しいものだよ。
そんな事言ったらそこらじゅうの貴族を連れてきそうだから言わ
ないけどね…。

「噂なんてそんなものでしょう？公爵家の噂も似たようなものよ？」

「公爵家の噂？どんな内容？」

「当主である公爵様は女性恐怖症。夫人は公爵家を裏から牛耳る鬼。
公爵家の三姉妹は、皆一様に美人。だが性格に問題有り」

公爵夫人はかの高名な”烈風”。

かつてトリステイン王国のマンティコア隊隊長を務め数々の偉業を
成し遂げた生きた伝説。

それ知る人からすれば、これが根も葉もない噂だとわかるだろう。

そもそもが今挙げた噂は全て信憑性の薄いものだが。

三姉妹の性格に問題あり。というのも問題の無い人間が存在するわ
けが無いのでご愛嬌である。

「せ、性格に問題有り？ど、どういう意味かしら？」

エレオノールは動揺を見せながらも詳しい内容を聞いてきた。その様子から聞きたいのは自分の噂だろうと思い、私はエレオノールに関する噂を話してやる。

「長女は他の貴族のプライドを叩き折るのが趣味。魔法学院に通っていた際に周囲の貴族のプライドをへし折って回っていた」

さすがに興味という事は無いだろうけど、他の貴族のプライドを叩き折ってたのは事実だろう。

「その噂：誰から聞いたの？詳しく教えなさい！」

「どの噂を誰から聞いたなんて覚えてるわけないでしょう？それで？噂は事実なのかしら？」

「そんなわけないでしょ！ぜ、全部出鱈目よ！」

少なくとも性格に問題があるのは事実な気がする…が発言は控える。これからラ・ヴァリエール公爵との交渉が待っているので心象を悪くしては困る。

無礼な態度で既に悪い印象しか与えてないかもしれないけど、今まで貴族に対し接する機会なんて殆ど無かったのだからしょうがない。

ほんの少しの沈黙のあとに、エレオノールは再び私に質問をしてきた。

「ねえ：噂が嘘なら、どんな病気でも治せるというのも嘘なの？」

「今まで治療してきて治せなかった病気が無いのは事実よ。どんな病気でも治せるのかはわからないわ」

最終手段として、体を作り直す方法でも取れば全ての病気は治せるだろう。

そこまでやってしまうと、治療ではなく改造だが…。

「なら、妹の：カトレアの病気は治せるの？」

「本人を直接診ない限りは何とも言えないわ。

それが本当に病気なら治せると思うわ。けれど治すかどうかは私が決める」

「治すかどうか決める？もしかして治療しないなんて言うつもり？」

今回に限っては、望みの報酬が約束されなければ治療するつもりは無い。

その辺りは公爵との交渉次第になる。報酬を期待できるからこそ今こうして公爵家に向かっているわけだが。

「治すつもりが無いのならここに居ないわ。

実際治すかどうかはまだ明言できないけれどね」

「断るなんて出来ると思ってるの？公爵家相手にそんな話したら殺されるわよ？」

そもそも貴族相手にそんな事したら殺されても文句が言えないわね」

「殺されない限りは文句言い続けてもいいのかしら？

どうせ私が死ねば治す手段なんて無いでしょうに」

つまり、私は死なないのだから文句を言い続けてもいいはずだ。殺されないのだから文句は言い放題。

私の私による私のための論法である。

殺されることは無い。精神力も尽きない。身体能力も人のソレよりも圧倒的に高い。吸血鬼の弱点は殆ど当てはまらない。

杖を失って無力化されることもまず無い。その心配は不要だ。

杖として契約しているのが”生命”なのだから、私が生きている限りは”私自身が杖”となり魔法が使えなくなることは無い。

ふと自身を見つめなおしてみても酷い理不尽さだ。それでも私は全く安心できないが…。

「…妹はどんな事をしてでも治してもらおうわよ」

エレオノールは呟くように決意を口にした。

どんな事をしてでも。というのが本音であれば私は治療するだろう。けれど彼女では私の欲する対価は払えない。公爵もそう思っているのであれば話は別だが。

「その覚悟が本物で、他の家族も同じ思いなら治してあげるわ」

実際は公爵だけがそう思っていれば十分ではある。

しかし交渉がどうなるかがわからない現状ではそれを彼女に明言するのは得策ではないだろう。

私にとって彼女は今のところ利用価値が無いので、余計な情報は与えないに限る。

というよりは、今後会う事も無いように願うばかりだ。

公爵家の面々とは今回限りの関係にしてほしいと思っているのだから…。

それ以降はエレオノールも黙り込み、馬車内は沈黙を保ったまま屋敷へと向かった。

その間、公爵との交渉について色々と対策等も考えてはみたものの、妙案は出なかった。

というより交渉相手の事を良く知らないので当然ではある。

…公爵は内政がお得意。ってことしかわかってないんだよね…

公爵に対する領民からの不満が他の貴族より少なかった。

他の領地を回ったときは、その地を治める領主に対する不満や愚痴がウンザリするくらい聞けた。

しかし公爵領に来てからは目立った話は聞かない。

下級貴族に対する不満はあっても、公爵に対する不満はさほど無いように感じられた。

恐れから来る閉口だったのかも知れないが、私自身ラ・ヴァリエール公爵領の治安はかなり良いと感じている。

生前の記録にある世界の治安と比較すれば御粗末なものかもしれない。
だがハルケギニア、トリステイン王国の中ではかなり治安が良いだろう。

…公爵の政治手腕が優れたものだとは仮定すると交渉は難航しそうですね…

対して私はあまりそういう交渉が得意じゃないしな…

とりあえず交渉の心配より、三女を回避する事を考えたほうがいいか…

2. 馬車内の空気が悪い（後書き）

あとから挿入した話なので矛盾が出る可能性があります。
改訂の可能性がありますが大筋は変更しません。

3. ラ・ヴァリエール

ついにやってまいりました。私の平穩を賭けた一世一代の大勝負。

ラ・ヴァリエール公爵との交渉の場です。

応接室と言うには些か豪華すぎる部屋でお互い座っている。

「はじめまして公爵様、御存知とは思いますが私はローラと申します」

とりあえず無難な挨拶をした。

というよりも、礼儀作法は知ってはいるけど実践したことが無いので余計な事をするところが出る。

更に言うと、ラ・ヴァリエール公爵から高貴なオーラがブンブン出て緊張する。

「噂は聞いている。素晴らしい腕前の医療メイジであるとな。

そう緊張しなくても良い。楽にして話してくれ」

…素晴らしい腕前の医療メイジ：だと？

あの理不尽に付けられたあだ名でなく、素晴らしい腕前の医療メイジ！

ちょっと怖いとか思って申し訳ない。公爵は凄くいい人だ！

全く関係ないところで公爵株が高騰した。

「では失礼して、普段どりの口調で話しを続けさせてもらうわね。想像はつくけれど、一応公爵様から私と呼ばれた理由をお聞かせ願えるかしら？」

よもやここまで口調が一変すると思わなかったのか、公爵は少しだけ驚いた表情を見せた。

しかしすぐさま平静を装ったところを見る限り、交渉上手なようだ。

「私の娘の治療をお願いしたい。無論ただでは言わん。

治療が成功したならば、私に出来る範囲で望みどおりの報酬を約束しよう」

…ここからが正念場か。

おそらく噂を耳にしてるなら私が貴族の治療は行なわないことも知ってる。

そして平民に対して多くの報酬を貰っていないこともわかってることだろうな。

「私が貴族の治療を引き受けない事は御存知よね？」

その理由も知っているのかしら？それ次第で話す内容が少し変わるのだけど」

「貴族の治療をしない事は重々承知している。理由については憶測だが、余計な恨みを買いたくは無いのだろうか？安い報酬で貴族の治療を引き受けてしまえば、他の治療メイジに恨まれるだろうからな」

「確かにそれも大きな理由ね。でも一番の理由があるの」

確かに恨みを買いたくないのは大きな理由だ。しかし、一番大事な理由は他にある。

「話してくれ、私に解決できる理由なら何とかする」

「今までも貴族から治療を頼まれたことがあるけれど、私の望む報酬を用意できなかったの」

そう、根本的な問題で、今まで依頼をしてきた貴族には報酬を用意できなかったからなのだ。

もちろん私の望む報酬は、貴族の地位を用意する事。

今まで依頼してきた貴族は良くて子爵だったので貴族の地位など到底用意できなかった。

お付の医療メイジに恨まれず、報酬として貴族の地位を用意できることが私が貴族を治療する条件。

つまり、必ずしもラ・ヴァリエール公爵である必要は無かった。

可能性が一番高いのがラ・ヴァリエール公爵だったのは事実で、そこに狙いをつけたのも事実だが：

「報酬の内容は？」

公爵の顔が強張った。絶対に無理であろう報酬を要求されると思っているのだろう。

何しろ私に治療依頼をしたのが、今まで全て子爵以下というのは知らないのだから無理も無い。

私の私見では貴族の地位を用意するのは無理でも、貴族の養子に迎えることは十分可能はずだ。

「私が望むのは貴族の地位。後ろ盾よ。

貴族の地位といっても直接爵位を要求するものじゃないわ。

適当な貴族の養子にでも入れてもらえれば十分」

公爵は複雑そうな表情をしている。

おそらく身元もわからない平民メイジを養子にする事が危険だと考えているのだろう。

「後ろ盾は当家であれば問題は無いだろう。

しかし貴族の養子に入れる事が出来るかどうかは…その者の素性による。聞かせて貰えるか？」

ここで私が嘘をついて養子にしてみらうという手もある。

しかし、下手な嘘ではバレるだろうし、正直私は嘘が苦手だ。

…誤魔化すのは大得意なんだけどね…

でも公爵は交渉上手だ。そんな相手に誤魔化しは命取りになりかねないな。

「私の名は、リース・アナスタシア。

アルビオンのノーザンブランド伯爵の妾の子よ。

表向きには賊によって殺害されたとされてるみたいね」

「ロード・ノーザンブランドだと！？あの伯爵の娘とは…」

賊によって殺害された。という噂は旅をしてる最中に耳にした。

私にとって嬉しい事情ではあったが、交渉においては少し面倒な事になりそうだ。

「父を御存知なのね。ではその息子、私の兄の事は知っているかしら？」

「顔は知っている。アルビオンを訪れた時に見たが、挨拶をした程度で詳しくは知らんな」

兄の事を知っていてくれると話は凄く簡単だったのだが、そこまで上手くはいかないらしい。

それに死んだとされた人間の名を語る私は公爵から見れば思いつきり不審者だ。

さっさと説明しておかないと不味いだろう。

「賊に殺害されたというのは虚偽の情報よ。実際は兄自身が私と母を暗殺しようとメイジを5人程雇って襲ったわ。

私はそのとき何とか逃げ出す事に成功して、以後数年は旅をしなから生きてきたのよ」

「…その話が事実であるという証拠はあるのか？」

もちろん証拠らしき証拠なんてあるわけがない。

一番の正念場が来たようだ。

証拠無しに公爵から信用を勝ち取れば私の目的は達成される。

「証拠は残念ながら無いわね。事実を知ってるのは私と兄を含めた襲撃犯だけでしようし。」

兄はその事件で私に重症を負わされたの、そんな不名誉を自分から言うわけもないでしょう」

「本名を私以外に明かしたことはあるか？」

微妙な質問だ。それが何か関係あるのだろうか。

事実だけを話して突っ走るしかないか。

「あるわよ。昔に会ったアルビオンの没落貴族二人に話したわね。
次の日には別れたから私の事を今でも覚えてるかは微妙なところ
ね」

多分、いやほぼ確実に覚えてるだろうけど、次会うときは他人と言
い含めておいたのであながち間違いでも無い。

「……最後の問いだ。貴族の地位を望む理由は？」

「昔約束しちゃったの。」

私に魔法を教えてくださいました先生とね」

公爵が今までで一番微妙な表情をしている。

自分で言ってる何故昔の約束にそこまで躍起になってるんだろうとも思うが…

…不死性は失いたくないんだよ…

あとでユッグを先生呼ばわりしたことで色々言われそうだな。

とりあえず言い回し的に、貴族になることを条件に魔法を教えてくださいました。とでも勘違いしてくれるだろう。

「本当に理由はそれだけなのか？」

「じゃなきゃ態々貴族の地位なんて欲しがらないわ…

その約束さえ無かったら貴族の治療なんて有無を言わず全部断ってるでしょうね」

…本当に要らない地位だと思ってる。

というかユッグとの契約から地雷と遭遇しまくってるしな。

テファ、マチルダさん、シエスタ、公爵家の方々と。

全てユッグと契約していなかったら会う事なんて有り得ない相手ばかりだ。

しかし恐るべきはそれを補って余りある魅力を持つ不死性だな…

公爵は何やら考え込んでいる様子。

今までの会話から、私が信用できるかどうかを考えてるんだろう。

私は嘘は言っていないのでこればかりは祈るばかりである。

時間にして10分ほど経過しただろうか。

公爵はようやく答えを出したようで、話しかけてきた。

「先に結論から言う。望み通りの報酬は約束しよう。

貴族の養子になること。公爵家が後ろ盾となることの二つでよかったな？」

「ええ、そのどちらも成功報酬で構わないわ」

…上手くいった！これで平穏な暮らしに大きく近づいた！

多分この世界に生まれて以来、一番嬉しい瞬間である。

治療を成功させる事が課題として残ってはいるが、生きてさえいれば快復させる自信がある。

全てが上手くいった。

生まれて13年目にして漸く望んでいた平穏な暮らしに手がかかったと確信した。

そんなふうを考えていた時期が私にもありました…このときは白紙手形を切ったことに気付く事が無かったのだ。

4. 体を蝕むゼロ

公爵との交渉を終えて、今私はカトレア嬢の部屋の前で待たされてる。

交渉を終えて興奮気味だった気持ちも時間が経つ事で落ち着いてきた。

…治療をする前に色々と話す事があるのはわかるけどね。

でももう30分は待たされてるな。

何か問題でもあったのだろうか？

聞き耳を立てようにも”サイレント”を使っているようで、物音一つ聞こえてこない。

まだ時間がかかりそうだと判断すると、私は治療をしたあとの事を考える事にした。

…おそらく公爵から貰える報酬は貴族の養子か。

伝統に重きをおくトリステインでは平民メイジを貴族の嫁にするのは許容できないはずだ。

無論当主になるのはありえない。超法規的措置を以ってもこの国では無理だろう。

待てよ？そもそもどの家の養子になるんだ？良くて子爵家、無難

にいくなら男爵家に養子に入る事になるか。

その考えに至って、漸く危険な事態に陥っていることを自覚した。

…まさかワルド子爵家に養子とかならないだろうな。子爵は独り身だから大丈夫だと思うが。

公爵家と繋がり深い貴族は他にどこがあっただろうか…

公爵家に仕える下級貴族が本命か？あれ、そうしたら私ここで暮らすなり働くなりしなきゃいかんのか！？

冗談じゃない！ここには三女ルイズっていう大型地雷以上の暴走必至の核爆弾があるんだぞ！？

「どうやら話は済んだようだぞ。ん？どうした深刻な顔をして？クク、何か間違いにでも気付いたのか？」

公爵家に来てからずっと黙ったままだったユッグが愉快そうに話しかけてきた。

…こいつ、絶対気付いてたな。

しかもこの様子だと中の会話をぼっち聞いてたっぽい。

そのうえでこんな嬉しそうに喋るってことはほぼ間違いなく私にとって最悪な結果になったはずだ。

公爵は出てくるなりカトレア嬢と二人で治療をしてくれと言ってきた。

立会わなくていいのかと訊ねると、カトレア嬢の希望だという。

信用してくれるのはいいのだが、公爵は不満な表情を隠しもしないので反対なのだろう。何も言わずに歩き去った。

置いてかれた私は、そのまま居るわけもいかずに部屋の中に入った。

カトレア嬢は確か勘が異常なまでに鋭い。

つまり私の知られたくない種族についての素性もばれる可能性がある。

…だからこそ治療だけをささっと済ませておさらばしたかったんだが…

「こんにちは。はじめまして、私がカトレアよ」

体調の悪さを感じられない朗らかな表情で挨拶をしてきた。

けれど私の目にはカトレア嬢の中にある異常な精神力の歪みが映る。

…これがカトレア嬢か。優しく聡明であるって評判だけど…

体の至るところに歪みがある。あれは精神力というより魔力だな。見ただけじゃ詳しくはわからないが、治療できない可能性もあるなこれ…

「…はじめましてカトレア嬢。貴女の治療をさせて頂くローラよ。名前は覚えなくてもいいわ」

…というより、治療が終わったらすぐ忘れて欲しい。

「あら、残念だけど忘れる事は無理みたい。
貴女のような人は私にとってはじめてなもの」

…忘れない。ではなく忘れる事が出来ないときたか。これはまあし
ようがないか。

ただ”私のような人がはじめて”。これは不味い気がする。
つまり吸血鬼なんぞと会うのははじめてと言いたいのか？

カトレア嬢の勘はどこまで正確なのがわからんから迂闊な事は
言えないな。

「私は一介の平民にして、平凡な医療メイジよ。
そこまで気に留める事も無いでしょう？」

「私ね、昔から勘が鋭いって皆から言われてきたのよ。
一目見ればその人の事が何となくわかるの。」

だけど、貴女みたいに見ても何もわからない人というのははじめ
てなのよね」

…何もわからない。つまりカトレア嬢は私を警戒しているのか？
未知の存在に対して臆病になるのは生き物の性だ。警戒するのも
当たり前か。

「なら貴女にとって私は、はじめて接する”人間”ということかし
ら？」

普通の人間同士で接する場合、相手を見ても姿形や表情しかわから
ないものだ。

カトレア嬢が相手の事を見るだけでわかってしまうのなら、彼女は今まで”人間”と接した事が無いということに他ならない。

「面白い言い方をするのね。でもそう。貴女の言うとおриだと思うわ。

けど忘れられない理由はそれだけじゃないのよ？」

「私が貴女を蝕む病魔から助けるから。なんて理由なら忘れていいわ。

慈善でやるわけじゃないし、ちゃんと報酬も貰うから」

「それも理由の一つだけど、もっと大事な理由があるの。でもそれを教えるのは治療が終わってからね」

カトレア嬢には申し訳ないが、会話の後半は殆ど頭に入ってこなかった。

さきほどから、私の目に映る歪みが脈動しているのが気になってしょうがない。

：毒物じゃないし、病気かどうかとも怪しいなこれ。

免疫力が低下してはいるけど、それ自体症状の一つと考えるべきか。

とりあえず病状や体調を申告してもらわないと見ただけじゃわからない。

「体の調子や今までの病状。出来るだけ詳しく話して。嘘や冗談は

無しよ」

カトレア嬢は今までの穏やかな微笑みから一転、真剣な表情で話を始めた。

「今はそこまで調子は悪く無いわ。けど体全体が少し重いわね。魔法を使うともっと体が重くなる。水の秘薬を使った治療で体は良くなるのだけど一時的なものみたい」

…水の魔法で溜まった魔力を循環させて治癒してるのか。
それが一時的な措置にしかないということは、対症療法にしか
なっていないってことだな…

メイジは、精神力を練り魔力に変換して魔法を使う。だから魔力自体はメイジであっても体内に持っているわけじゃない。
通常の水の治癒では存在する魔力を動かす事は出来ても消す事は不可能なので、カトレア嬢の体内にある魔力は生まれて今まで溜まりに溜まった量だと推測できる。

木の系統魔法であれば魔力を消す事はできる。だからといって魔力を消しても、何れまた溜まってしまいうだろう。

…残留している魔力は、木の系統魔法を使えば取り除く事が可能かなあ。

けど魔力の溜まる原因がわからない限りは完全に治癒することは出来ないか…

魔法を使うと病状が悪化する。という事からは、魔法を使う工程

に問題がありそうだと推測できるけど：

産まれながらに病弱だったって話だから、魔法は直接的な原因じゃないなあ：

「どんな魔法でも使ったあとすぐに悪くなるのかしら？」

「すぐには悪くならないわ。系統魔法は使ってもそこまで悪くはないの。

けれどコモンマジックは使ったあと、少ししてから倦怠感に襲われるわ」

この症状には心当たりが一つ。私の知識の中にある。

稀に王家の者が生まれながらに持つ体質の一つで病気ではない。

精神は虚無の担い手であるのに、肉体が普通のメイジと変わらない場合になる体質。

虚無の属性を持つコモンマジックに必要な以上の魔力を生成するが、使用する量が少なく余剰分が体内に残る。

精神力と違って魔力は体内に残しておくのは毒にしかない。こういった形で魔力が作用するかは多岐にわたるので、症状は一定でなく病気であるという先入観があれば絶対に事実気付くことはない。

王家の医療メイジであれば、この体質のことは良く知っているだろ

う。

その場合は、コモンマジックを使わないようにして生活させればそこまで悪化しない。

明確な治療法は今のところ存在していない。

水の魔法では魔力を動かしても消せはしないし、虚無のデイスペルで消せるのは結果のみで魔力は消せない。

通常の担い手であれば虚無にも目覚めれば正常にコモンも扱えるようになる。

しかし肉体が担い手として出来ていない者が虚無に目覚めることは無い。故にコモンを正常に使えるようにはならないのだ。

魔法自体が成功してしまうからこそ性質が悪い体質だと言える。

…困ったな。病気なら喜んであっさりと治すんだけど…

体質となれば、体調を改善して以後の生活を指導することで悪化を防ぐのが無難だ。

けどそれは完全に治癒したとは言えないしな。

しかも何より問題があるのはこの体質の事を説明できないってことだなあ。

この体質は王家の正統にしか発現しない。それを説明する事は公爵家こそが王家であると言うのに等しい。

王家と公爵の血生臭い争いの原因が私だなんて冗談にもならない。

しかも全てを説明する。ということは、王家はカトレア嬢の体質の事を知って黙っていたことも露見する。

王家の人間全てが知ってるということは無いが少なくとも王と王家に仕える医療メイジは知ってて黙ってるんだろうし。

…王家に関わるという部分を省いて説明するしかないな。

しかしそれだと私が知ってる理由が無いな。書物で得た知識って言えば納得してくれるかねえ。

カトレア嬢の体質の事を王家が知っているなら治療すること自体がアウトだ。

「カトレア嬢。悪いのだけど、公爵様と相談しなきゃいけない事が出来たみたい。

少しの間部屋を出るからそのまま安静にしていって頂戴」

そう告げるとカトレア嬢は悲しそうな笑みを浮かべた。

恐らく治療することが無理である。と受け取ったのだろう。

「治す方法を検討するのに公爵殿とお話してくるだけよ。心配しないでいいわ」

そう告げ、振り返る事無く部屋の扉を開けると、そこにラ・ヴァリエール公爵が立ってた。

…探す手間が省けて助かるんだけど、予め部屋の前で待っていると

っ
て
お
い
て
欲
し
か
つ
た
よ
：

心臓に悪い。私の心臓は何かあっても止まらないけどね…ははは…

まさかの交渉第二弾。前みたいな失態はしないように十分注意しないとな…

5. 公爵の策謀

またもややってまいりました。私の平穩を賭けた一世一代の大勝負パート2。

再びラ・ヴァリエール公爵との交渉の場です。

応接室と思わしき場所で再び机を挟んで相對している。

この交渉で最も大事なのはどこまで情報を開示するか。である。

公爵は一応私を信用してくれているみたいだし、体質に関する事は全て言ってもいいと思う。

私も公爵は信用できると思っている。

けれど周囲と立場が情を許さない状況という物を招きかねないのが今回の話だ。

全てを話せば、したくもない決断を強要することになる。

だからこそ私は王家の正統である。という事だけは何が何でも言わないように決めた。

「それで大事な話とは何だ？ もしや治療が無理であつたと？」

最初の交渉と違って公爵は余裕が無くなっているようだ。

如何なる病でも治療してきたとされる私に無理と言われれば最早絶

望的なのだろう。

「結論から言うと、治療は可能よ。ただ問題がいくつかあるのでその相談をしたいの」

「必要な物があるのか？秘薬の類なら豊富に用意してあるぞ」

「必要な物は緘口令ね。治療した事は誰にも知られてはならない。カトレア嬢の病気…というより体質なのだけど、これについても誰にも公開しないこと」

想像と全く違う私の返答に、公爵は一瞬啞然としたが、すぐに表情を戻し話を続けた。

「理由を聞こう。その結論に至った考察から全て出来る限り話せ」

話が不穏な内容であると断定したのだろう、公爵は今まで以上に威圧的な声で問いかけてきた。

私はできる限り簡潔に、とりあえず体質の話だけを説明した。

「カトレア嬢の体質は王家の血を引く者に発現するものよ。」

その体質のせいで病気にかかりやすい。病気は治せても体質は従来の治癒では治せない。

王家にはその体質の者が病気にかからないようにする手法が伝わっているはずね。

でもそれは幼い頃から生活を抑制することで悪化を防ぐ手法で、
良くするものじゃないわ。

カトレア嬢ほどの年齢からその手法を取っても悪くならないだけで
良くもならないから効果は殆ど無いでしょうね」

一気に説明したので、公爵の反応を待つために一度話しを区切る。
少しの間、公爵は何かを考えている。おそらく聞いた情報を頭で整理
しているのだろう。

そして顔をあげると私のほうを真剣な眼差しで見つめてきた。続き
を話せという事だろう。

「ここから先は憶測も混じるけれど…

王家はカトレア嬢の体質を知っていて黙っている可能性がある。
理由まではわからないけれどね。

そしてその体質が改善されたとわかれば、どうなるか。

恐らくカトレア嬢はアカデミー行き。もちろん研究者でなく被験
者としてね。

私は王家に追い回されて、捕まれば尋問か拷問でもされるわね。

もし王家でなく他の貴族にそれが漏れたら、カトレア嬢こそ次期
女王にふさわしいなんて持ち上げる輩も出てくるでしょう。

何しろ今まで王家の者にしかこの体質を持った者は居なかったの
だから」

この特異体質が王家の正統の証であるということを経験悟られない
ように、その可能性がある。という示唆に留めて説明した。

公爵家令嬢と言えども、王家の命があればアカデミーに出頭させら

れるだろう。

私は勿論普通の犯罪者以上の待遇で手配される。懸賞金はとんでもない額になるのは確実だ。

何故追いかけられる事前提なのか？それは勿論私は逃げるからだ。王家になんて関わりたくない。

王家がカトレア嬢の体質について把握してるかどうかは、可能性としては8割くらいだ。

公爵家の令嬢が奇病に悩まされているというのは今や有名な話であるし、公爵自身も治療に関していろいろ手を回していたのだから王家にも伝わっている可能性が高い。

公爵は交渉上手な上に、非常に頭が良く判断力もある。恐らく正しく私の伝えた内容を理解してくれているだろう。

その全てが起こり得る話であり、可能性としては非常に高いものであると。

私が逃げるのはともかくとして…。

時間にすれば1時間近く経っただろうか。出された紅茶は既に冷め切っている。

公爵は考え込んだまま動かない。大して暑くも無いのだが額には汗を滲ませてることから苦悩と葛藤は計り知れないだろう。

公爵は顔をあげて話し出した。漸く答えを決めたようだ。

「事实は：私とカトレアまでに留めよう。それ以外の者には誓って口にはしない。カトレアにもそう言い含めておく。

治療後には、カトレアをラ・フォンティーンの屋敷に移して、表向きには公爵家が厄介払いをしたとする。

この屋敷には他の貴族が頻繁に訪れる、この家に居ては隠し通すのは難しい故に出て行つて貰わねばならん：」

「家族にも説明しないの？急に次女を外に出すなんて言っても納得しないでしょう？」

「妻も他の娘も、融通の効かぬ性格をしているからな：説明したところで納得はしまい。

最悪、王家の血が証明されたと喜びながら触れ回る可能性すらある。

カトレアを家から出す事は、私から言えば何とか説得できるだろう」

私の知識によれば三女は癩癩持ちで、しかも騙されやすい。良くも悪くも素直な性格だ。

：なるほど、確かに説明するのは旨くないか。

公爵夫人と長女は隠し事は出来るだろうけど、恐らくこの話自体が納得できないだろうね。

でも：公爵様を疑うわけじゃないけど、説得なんて無理じゃないか？

公爵夫人は厳しいながらも娘を大事にしてるみたいだし、三女はカトレア嬢に凄く懐いてるって話だし。

長女もアカデミーで次女の病気を治すために色々研究してるって噂に聞いたほどだ。

「本当に説得できるの？　そう思える要素があるなら参考までに聞きたいわ」

「実はだな…報酬の貴族の養子に迎えるという話なのだが…」

…どうしてその話がここで出てくるんだ？

「ラ・フォンティーヌ家に迎え入れる予定なのだ。

私としては公爵家に仕える者の養子にと考えていたのだが…

娘は自分を治療してくれた人に嫁ぐ事を昔から希望していたのだ、しかし相手が女性とあっては無理な話だろう。

報酬の事を娘に伝えたところ、ならばせめて家族として迎え入れたい、そう懇願されてな」

…なるほどカトレア嬢と会う前に待たされてたのはそれが原因だったのか…

いやそうじゃなくてラ・フォンティーヌに入るってことはカトレア嬢の養子になるってことか！？

三女の姪になるとか絶対巻き込まれるだろ！

「お前にはラ・フォンティーヌの養子となってもらい、表向きはカトレアの治療のため付きっ切りで看病してもらおうとする。

絶対安静と触れ回ればカトレアは貴族の者と会う必要もあるまい。無論、そのような生活をずっと続けさせるつもりはない。そうして稼いだ時間を使って私は出来る限り手回しをしよう。

何れ安全な環境を私が作り上げる事が出来たなら、二人とも表立って生活できるようになる」

…公爵様の提案は悪くはないか？

むしろ現状で私にとっても最善っぽい。

なにしろ夫人、長女、三女と距離を置くことができるのが大きい。全く会わずに居るのは無理だろうがそこは割り切るしかないかな。

「カトレア嬢はまだ若いし、私とそこまで歳が離れていないから養子にするのは無理がないかしら？

それにラ・フォンティーヌ子爵家は一代限りの家よね？養子を取ると問題がありそうね」

「最近、公爵家の家臣で専属の医療メイジの一人が亡くなってな。

お前はその娘という事にする。

治療の為に医療メイジを派遣するのに、医療メイジの娘を養子に取る。という事であれば何とかできる。

ラ・フォンティーヌは確かに一代限りだが、養子を取っても継がせなければ何も問題は無い。

むしろ跡継ぎにはならないからこそ、養子を取るのが簡単だとも言える」

…なるほど、養子にするのはあくまで手段であると装うのか。確かにそれならば問題は無いかも。

跡継ぎ云々は正直養子に入れるなら何も問題は無いか。

爵位が欲しいわけじゃないと事前に言っているわけだしね。

「爵位の心配をしてるなら問題は無いぞ。その亡くなった医療メイジは男爵でな。」

その娘という事であれば同時に男爵位も得る事になる。

爵位が手に入るのに養子になるのは余計だろうが、男爵が子爵であり公爵家息女のカトレアと二人で暮らすというのは難しいからな」

爵位手に入ってしまった：

普通、こんな手段は無理だろうが身元保証人がラ・ヴァリエール公爵であることを有効活用した裏技だ。

男爵位を持つ公爵家令嬢の子爵の養子。物凄くややこしい立場である。

「物凄く名前が長くなりそうね：」

立場がややこしくなればなるほど、爵位が手に入れば入るほどに名前が長くなるのがトリステイン貴族の特徴だ。

「ローラ・シュタイア・ド・リメジー・ド・ラ・フォンテーヌ。となるな。」

本名で語るのであれば、リース・アナスタシア・ド・リメジー・ド・ラ・フォンテーヌだな」

：長い：自分で名乗るのが億劫になってくる。これだからトリステイン貴族は：

アルビオン貴族も正式名は長いが、公式な場においても名乗りは名

と姓だけか、爵位のみで通る。
しかし伝統を重んじるトリスティンでは公私にわたって最初の名乗りは正式名が必要だ。

「名前が長いのはしょうがないわね。とりあえずはその案で進めて頂戴。

治療に関してはここでやるよりも、ラ・フォンテーヌ領に移ってからの方が良さそうね」

「うむ、すぐに手配しよう。客室を用意するから今日は泊まってくといい。

十日以内には出れるようにしておく。男爵位の申請と養子縁組の書類も性急に届けさせる。」

「私はなるべく他の家臣や使用人と会わないほうがいいでしょう？
ここから一番近くにある宿で滞在しておくわ。ラ・フォンテーヌ領に向かうときに寄って頂戴」

「私が一番会いたくないのは家臣でも使用人でもなく、公爵の家族なわけだが…」

公爵の説得が難航したり失敗した場合に私の身がとても危ない。精神的な問題で。

「気を遣わせてすまないな…」

「一番私が気を遣っているのは、この計画じゃなくてお宅の大型地雷ですけどね。」

三女に会わずにここから去れそうなのが救いだなあ…

願わくば、二度とこの屋敷に立ち寄る事がありませんように…

5. 公爵の策謀（後書き）

原作開始までここから更に加速します。

原作前のお話というのは掘り下げるのが難しいです。すいません。

6. 平穩に至る道

念願の平穩な日々を手に入れる事ができそうだ。

現在私はラ・フォンティーン領に義母様ことカトレア嬢と使用人とで、三人で静かに暮らしている。

公爵家から義母様を出す計画は、さして問題なく進行した。細かい問題はいくつかあったが、それでも計画に大きな支障が出ることは殆ど無かった。

義母様の体調はひとまずは良くなった。

体質改善は時間がかかるため未だに完治したとは言い難いが、魔力の霧散は水と木の魔法によって達成した。

それによって魔力の歪みは解消されたものの、完治するまでは魔法の使用は禁止している。

ここまで計画は全てが順調に進んでいる。

公爵家の他の方々とはあれ以降会う事も無かった。公爵夫人はしき

りに私と会わせろと言っていた。とは公爵の談。
ラ・フォンティーヌ領での生活が安定したら会う機会を設ける。という事で落ち着いたがまだ会っていない。私としてはこの先も遠慮したい。

長女とはまともな会話こそしなかったものの、一応面識はある。私を信用してくれるというのだが、どうしてそうなったかは知らない。研究者の一人として義母様の病の詳細と治療の方法を知りたがっているようだ。勿論私は教えるつもりはないが…。

三女には義母様が療養生活のために屋敷を出るとしか説明しなかったらしい。公爵は本当にいい仕事をする。

義母様を介した又聞きだが、私の事は複雑に思っているようだ。大好きなちい姉さまを助けてくれた恩人。というだけでなく、ちい姉さまを私から引き離れた張本人。とも思われてるせいだろう。事実なのだが、どのみちカトレア嬢は病が完治すれば家を出ることになってたんだろうから恨まないでほしい。

ちなみに私は現在フォンティーヌ領で診療所を構えて領民の治療に勤しんでいる。勿論報酬は食材だ。

これは義母様の提案というかお願いによるもので、私も暇を持て余していたので快く引き受けた。

そのせいで私は日中家を空けるので、信頼できる使用人を一人だけではあるが公爵に手配してもらった。

リディという名前の敏腕メイドで、炊事洗濯は勿論、介護や看病の心得もある女性だ。

義母様が屋敷を出たといっても家族達との別れは一時的なもので、年に1、2回は公爵夫人と娘達が訪れている。

公爵家の方々が来たときには治療活動を盾に全力で逃亡している。夫人と長女はいいが、二人が来訪する時には三女ルイズ様が一緒なので会うわけにはいかない。

公爵は面会する暇が無いと嘆いていたが、それも方々に手を回し義母様と私の身の安全を確保するため。本当にいい仕事をする人だ。生まれた時代がもう少し早ければ恋していた可能性すらあると思う。それほどに公爵株は急高騰している。

一つ、予定通りにはいかなかった部分がある。私は男爵位を継ぐ事ができなかった。

というのは、今は無理という意味であって、私がある程度の年齢に達するか、結婚すれば直ちに爵位を与えられるらしい。

これは私にとってかなり都合が良い事でもある。何しろ爵位を授与するということは王家に顔を出さなきゃいけないからだ。

王家に顔を覚えられるのは今の段階では遠慮したい。王が崩御されてからのほうがいくらか安全だ。

私は王が義母様の体質について把握してると思ってる。

ちゃんと根拠もある。後継を指名せずに崩御した。という物語の知識と符合するからだ。

後継を指名しなかったのは、王家の正統が公爵家にあると把握していたからじゃないかと思ったのだ。

となれば義母様の体質の事か、三女ルイズの虚無。どちらかを知っていたはず。

虚無は失われたとされ、担い手の特徴や目覚めるまで魔法が失敗するという記録は残っていない。

つまり虚無に気付く可能性はほぼ無い。なので次女の体質のことを把握していたのだろう。

治療活動を終えて一人診療所で息をつきながら、現状について思い返す。

：順調なのか、そうじゃないのか：良くわからんなこの状況。

物語に巻き込まれる可能性は上がったけど。この立場なら深くは関わらないでいられるはず。

義母様の体質は秘匿する必要があるが、三女の虚無が露見すればその必要も無くなる。

そのときまで穏便に暮らせれば、以後問題は殆ど無くなるはずだな。

ここまできて今更な話だが、私は物語にある話の流れ、所謂一つの未来の話だが、それを信じていない。

あくまで、そうなる可能性がある。程度に考えている。

今回公爵家と関わったことで、物語が破綻した可能性は高いだろう。

：どんなに物語が変容したとしても、私は私が安全なら構わない。
自分が一番大事だ。

好きとか、嫌いとか、最初に言い出したのは誰か知らんが、自分
が一番好きだ。

義母様やテファは、確かに個人的に好きではあるが、それでも私
は自分が一番可愛いのだ。

私には他人を守るだとか救うなんて余裕が全く無いしなあ：

「このまま静かに暮らせればいいわね：

思わず言葉が出てしまった。

「今この状況がお前にとっての”平穏な生活”なのか？我にはこれ
が平穏とは到底思えぬぞ」

ユググの言うとおりではある。私の望む平穏というのは隠居ではな
い。この平穏には自由が無い。

「私の望んだ平穏とは違うけれどね。でも悪く無いと思うわ。

今までが私の望む平穏とかけ離れていたから、今の状況が好まし
いだけ」

「しかしこのままでは居られぬだろう？お前の言う物語が事実であ
れば尚の事だ」

「あなたが貴族になれって言うからそうなったんでしょう：

平民のままなら戦乱であつても影響は少なかったのだしね」

今の私の一番の課題は、貴族という立場で物語に如何に干渉しないようにするか。なのだ。

貴族という立場上、ある程度関わってしまうのは止むを得ない。それはある程度諦めている。

ただ自分が亜人のハーフであることは隠さなければならぬし、ユッグのことや生命の系統魔法もバレたら不味いだろう。

今の生活であればそれらがばれることは無いだろう。だから今の状況を出来る限り維持したいと思う。

…ここまで来るのは大変だった。これから何とかなるといいなあ。

「手段を決めたのはお前であろう。我に責任を求めるのは間違っているぞ。

それにこのような面白い手段を取るとは我は全く想像していなかったぞ。おかげで楽しませてもらっているのだがな」

…私の今まででの一番の失策…それはコイツと契約したことじゃないだろうか…

1-6. Out Side — 三姉妹の憂鬱

<Side ルイズ>

ちい姉さまの病気が治る。そう聞いたときは凄く嬉しかった。

何時か私が病気を治してあげるんだ。と思っていたから少しだけ複雑な気持ちもあったけど、治るとわかったときは純粹に嬉しかった。

だから私はそれがどういう結果になるかなんて全く考えてなかった。

すぐには治らず、長い時間が必要だと聞いたけど、少しずつ良くなっていくなら悪い事なんて一つも無い。

そう思っていたから、お父様から聞かされた話に全く賛同できなかった。

ちい姉さまが家を出ていってしまう。私はそれを許せなかった。わがままだっていうのはわかってる。それでも私は嫌だった。

その気持ちは、ちい姉さまから話を聞いて更に複雑なものになった。

ちい姉さまの病気を治してくれるメイジは、最近亡くなった家臣の娘だという。

各地を旅しながら平民達に治療を施していた。私も噂は聞いた事がある。聖女と呼ばれている少女だ。

驚く事にその少女は私と同じ年齢らしい。

私と同じ歳で”聖女”と呼ばれ、平民に慕われ、誰の手にも負えなかったちい姉さまの病気を治療できる少女。

：対して私は、お母様に叱咤され続け、公爵家の家臣からは陰口をたたかれ、育てて貰ったお礼の一つも家族に返せない。

更にその聖女はメイジとしても優秀だという話だ。私と同じ歳にして水と土のライン。二つの系統を均等に扱えるメイジは一流の証だ。：私は未だに一度も魔法を成功させた事が無い。コモンマジックの一つも出来ない落ちこぼれの貴族。

私は、その見た事も無い少女相手に嫉妬した。けれどその少女が居なければちい姉さまの病気は良くならなかった。

感謝と憎悪と羨望と嫉妬が混じり合って、この気持ちをどうすればいいかわからなくなった。

幸いその少女とは一度も会っていない。

ちい姉さまが家を出てから何度かラ・フォンティーンの領地に行ったけれど、少女は医療活動で忙しいらしく何時も家には居なかった。

そんな状態が続くうちに、気持ちに整理がつくまではその少女には会わないほうがいいだろうと私は結論を出した。

それがただ逃げてるだけだって、気付かないふりをしながら：

<Side Out>

<Side カトレア>

よくわからない娘。自分の治療をしてくれるという少女をはじめて見たときそう思った。

そんな感想を言葉にして伝えてみると、少女は私にとってはじめての”人間”だ。と言ってきた。

抽象的すぎて伝わらないようなその言葉は私の心にストンと落ちた。

私は勘が鋭い。抽象的でもなく、ただのお世辞でもなく、そう言われてきたし私もそれを自覚していた。

だから見てもわからない相手というのは私にとってはじめてだった。けれど人同士の付き合いでは当たり前のこと。

だからこそ少女は私にとってはじめて出会った”人間”なんだと理解した。

そして私にとって、はじめての娘にもなる。そう考えると少女を愛しいと思えた。

時間はかかるけど完治すると聞いたとき、私は言葉にできないほどに嬉しくて涙が止まらなかった。

そんな私を見てお父様は慌ててた。対して少女はただ柔らかに微笑んで私が泣き止むのを見つめていた。

その時から、私にとって少女は愛しい娘になった。

母娘というには歳が近いけれど、それでも私にとって少女は愛しい娘に違いなかった。

私の事を母と呼んで欲しいと言ったら、凄く渋っていたのが残念だったけれど。

私の治療には時間がかかるらしく、私は愛しい娘と二人で家を出てラ・フォンテーヌ領で静養することになった。

二人で暮らす事になってからは、毎日のようにお喋りに付き合ってもらった。

そのうち、娘も私を義母様と呼んでくれるようになった。私はとても嬉しかった。思わず実家に手紙を出そうとしたけれど止められた。

私の体調はこれ以上無いほどに良くなった。魔法を使うと悪化するというので生活に制限はある。

けれどそれを補っても余りあるほどに私は活力にあふれていた。

だから私は、娘に好きな事をして欲しくなった。娘は私の治療をするために一緒に居てくれている。

そのせいで他の事が何一つできない生活を強いてるのじゃないかと心配になったから。

そして私は娘の噂を思い出した。元々旅をしながら平民達の治療をして各地を渡り歩いていた聖女である。という噂を。

だから私は娘に治療活動を勧めた。私がいるせいで遠くには行けなけれどせめて領内で以前のように医療活動をしてもらおうと思った。

何時か私の元から去っていくだろう娘に、母として出来る限りの事をしてあげたい。

今私の元に居てくれる娘に、貴族として出来る限りの施しをしてあげたい。

私は生まれてはじめて自分が貴族になった。そう思った。

私を救ってくれる王子様…

私を助けてくれる王子様…

私を支えてくれる王子様…

そんな夢見る少女はもう終わり…

愛しい天使が私を救い、助け、支えてくれた。

私の愛しい娘に優しい時間がこれからも続きますように…

<Side Out>

<Side エレオノール>

聖女の噂は知っていた。

”聖女に治せぬ怪我はあれども、病はその全てを払う”

所詮は噂。恐らく今まで招いた水メイジ達のように、聖女もカトレアを治す事は出来ないだろう。そう思ってた。

お父様の言いつけで聖女を家に招き、カトレアの治療を頼む。という話を聞いた私は使者の役目を申し出た。

聖女とやらを自分の目で見て、噂の真贋を確かめてやろうと思った。平民の治療をしてるような治療メイジなんて大して腕も良くないだろうと思ってた。

私は、お世辞にも良い性格をしてるとは言えない。自分でもそれはわかってる。

だから私と正面向き合って会話する相手は、いつもどこか怯えた様子を見せる。

けれど聖女は表情を殆ど崩さなかった。無愛想な態度。高圧的な言葉。

なんて失礼な奴だ！そう思いつつも、私は何処か嬉しく思っていた。屋敷に向かう途中少しだけ話をしてみたところ、確かに噂は当てにならない。そう思った。

今までしてきたことは全て自分の為に行ったことだと公言。美味しい食事のために治療に勤しむ。

始祖の御使いなんて言われるのは迷惑だと言う。

質問に対して何も飾らずただ事実を話す。嘘を吐くならもうすこしまともな事を言うだろう。

この少女は嘘を吐かない。そう判断した私は治療について質問してみることにした。

今まで治せなかった怪我はどういうものか。

―曰く、自虐趣味の人間は治さない。馬鹿につける薬は無い。

本当に治せない病気は無いのか。

―曰く、病気であれば例外なく治せる。けれど治すかどうかは自分が決める。

とんでもない医療メイジが居たものだと思った。

目上の貴族に対してそんな事を平然と言えば殺されても文句は言えない。

私は思わずそれをそのまま少女に伝えてみた。

すると少女は全く想像していなかった返事を返してきた。

―殺されなければいくらでも文句を言ってもいいのか。

この少女は、私が想像もしていないような地獄を知り、それを生き抜いてきたのだろう。そう思えた。

聖女なんて生易しい者じゃない。もっと深く絶望した堕ちた御使い。そう感じた。

悪い印象ばかり残るような会話だったと思う。

無礼な態度に慥然とした表情、皮肉交じりの会話。

貴族の嫌うであろう要素を豪勢に揃えた少女。

私はそういった者が嫌いだ。

貴族であることを誇りに思い、毅然たる態度を取る事を心がけて生きてきた私にとって、あの少女は許しがたい。

そのはずなのだが、不思議とこの少女の事は嫌いになれなかった。

私にとって、はじめて正面きって会話をしてくれた相手だったからだろうか。

態度は悪いものの嘘や世辞など一切飛ばさない少女は私にとってはじめて対等な立場で話せる相手だったからだろうか。

理由はまだわからない。

カトレアの娘になったという話を聞いたとき、私は何故か少し嫌な気分になった。

それもやっぱり理由はわからないままだ…

<Side Out>

7. 虚無からは逃げられない

ラ・フォンテーヌの領地に来てから一年半が経過した。

この一年、何事も無く過ごす事ができた…わけもなく。

公爵一家襲来や、使用人雇用だとか、伝染病発生だとか、色々な事があった。

公爵一家襲来は義母様の勧めではじめた診療所での治療を理由に全力逃亡した。

公爵様が居たら逃げる事も出来なかっただろうが、王家や他貴族への根回しで忙しいらしく居なかったのでこれ幸いと私は逃げた。

使用人雇用は診療所開設のために、家を留守にする事が多くなるであらう私のために義母様と公爵が相談して招いてくれた。

そうしてやってきたメイド、リディはそれはもう優秀だった。もの凄く優秀だった。

おかげで私は貴族としての行儀作法を叩き込まれる事になった。たった一ヶ月で…。

伝染病の発生はさほど問題にはならなかった。発生当初に診療所にきた患者の治療で気付く事が出来たのだ。

おかげで簡単な治療薬を領民に配布。感染初期に対処することが出来たのでさして大きな被害は出なかった。

余談ではあるが、伝染病が発覚してから私は一週間ずっと食事以外の休憩も無しに治療薬の調達と生成に勤しんだ。

ちなみに義母様の治療はほぼ全て完了している。

ほぼ全てというのには理由がある。それは身体は担い手の魂に見合う物に治療というより改造を施した。
だからもう魔法を使っても魔力が体に残留する事は無い。使えればの話だが…。

正しく虚無の担い手となった義母様は、担い手として目覚めていないので魔法が使えない状態なのだ。

ちなみに魔法を使うと爆発する。以前は水のトライアングルだったが今ではゼロとなってしまったが本人はあまり気にして無い様子。
「ルイズとお揃いになっちゃったわね」なんて笑って話していた。

強かな女性だと思った…言葉に出すとあとが怖いので言わないが。

もちろんそんな状態の義母様を世に出すわけにもいかず、治癒したにも関わらず隠居生活である。

家族と離れ離れで暮らすのは辛いのではないかと聞いてみたら物凄く怒られた。

「母は誰よりも我が子と一緒にいたいと思うものよ」と涙ながらに

叱咤された。嬉しかったけど複雑だ。
実の母より愛してくれている事が。

そうは言いつつも義母様は公爵一家と頻繁に手紙のやり取りをしている。のだが：

最近の手紙を見せてくれない。以前は手紙の内容に一喜一憂して私にも見せてくれていたというのに。

とそんな具合にちょっとした事件はあるものの、一応は平穏な暮らしを満喫できている。

そんな折、私の15歳の誕生日を翌日に控えた日に突然ラ・ヴァリエール公爵が診療所にやってきた。

「変わらず息災なようだな」

「診療所で言う台詞では無いと思わない？ 御客からすれば皮肉よ？」

公爵は僅かだが眉を顰めた。

「そうであったな。ところで礼儀作法をメイドから習ったと聞いたのだが：以前と変わらん」

「義理と言えども祖父が相手なのだから無礼は許してくれないかしら？」

公爵が祖父という言葉に反応して苦笑いの表情を見せる。

「…まあ私に対しては構わんのだが、今後他の貴族に会うときは大丈夫なのだろうな？」

「心配要りませんわ。気心の知れた公爵様がお相手であればこそ、私もこのような態度で居られますのよ？」

自分で自分が気色悪いと思った…。公爵も同様だったようで微妙な顔をしてる。

「私が悪かったから話し方は戻してくれ。お前にそういう態度を取られると調子が狂うようだ」

なら最初から言わなきゃいい。というか丁寧な言葉遣いをする自分が一番調子を狂わせる。

「ところで、態々こちらを訪ねた理由は何かしら？義母様は自宅にいるのだけど？」

「ああ、カトレアにはここに来る前に会って来た。治療経過も娘から全て聞いてある。」

それよりも今日はお前に用があって来たのだ」

公爵が私に会う理由で治療経過以外の案件とえば、思いつく内容はそう多くない。

「私に？もしかして根回しの件で進展があったの？」

「そうではない。一応義理と言えども孫娘の誕生日なのだ。私から何かプレゼントでもしようと思っただけ」

「プレゼント？妾にでもしてもらえるのかしら？」

今までで一番微妙な顔…というより何かに怯えた表情を見せる公爵。
：暫く会ってなかったけどこんな表情を見せる人だったか？

「そんな事したら妻に殺されてしまう…。それにそんなプレゼントを孫娘にやる祖父がどこにいる！？」

なるほど夫人の恐怖か。普段から冷静な公爵が物凄く取り乱している。それほどまでに怖いのか…

「ゴホン！…それでプレゼントの内容だが、一つ目は爵位だ。

以前はまだ若いとの事で継ぐ事が出来なかったが15歳になったことで男爵位を継ぐ事が許可された」

「確かにそんな話になってたわね…でもそれって私が王家に顔を出す事になるのよ？大丈夫なの？」

「問題無い。最近国王陛下は酷く体調を崩していて叙勲式にも出席できん。代理を王妃が務めるだろう。

王妃が王家秘伝の体質について知っている可能性は無い。裏付けも取ってある」

なるほど、さすが公爵。そのあたりの心配は無用らしい。

「ならいいわ。それで？一つ目という事はまだあるのでしょうか？」

「お前のトリスティン魔法学院への入学だ。

学院の許可も取ってある。特待生として招かれる事が決まった」

…な、なんだと！？

ルイズと私は同年齢だったはずだ。そして彼女は15歳で入学。私は明日15歳になるわけで…

まだルイズは学院に入学していない。つまりは…私はルイズと同学年になる！？

今の平穏を壊してくれるのは王家だと思っていたら、味方だと思つた公爵がぶち壊してきた！！

いやいや、公爵に私がそれを望んでいないと話せば何とか…

「ちなみにルイズも同時に入学予定だ。カトレアの許可も取ってあるぞ。

治療はもう済んでいるとカトレアに聞いて、私としても計画が無駄にならなかったと安心したぞ」

…義母様の許可まで取ってあるとかどうしろと。

義母様の治療を理由に逃げようと思つてたというのに！

それに加えて学院への交渉も済ませて、特待生という立場まで用意してあるとか…

根回し完璧か。公爵の優秀さが恨めしい…

「…診療所を留守には出来ないわよ？」

かなり苦しい言い訳だがこれで何とか引いて欲しい。

「そう言うと思って後継の水メイジも手配しておいた」

しかしまわりこまれてしまった。

「この事を知ってる人は公爵と義母様以外に誰が居るの？」

「入学に関しては他に妻と学院側に伝えてある。

エレオノールとルイズにはあとで話そうと思ってたのだが。妻とカトレアには話さないほうがいいと言われたな…」

公爵が優秀すぎる。敵に回るところも厄介な相手だとは思わなかった。公爵自身は善意でやってるつもりなのが更に厄介だ。

…もう何が何だかわカラナイ。

虚無とか虚無とか虚無に、私は呪われているのだろうか。

「そう…ならその二人には話さないで置いて。

それで特待生というのはどんな特典があるのかしら？」

「学費が一部免除されるが、学費は全て公爵家で持つから心配は要らん。

あとは生活環境の優遇。寮に研究室付きの部屋を用意してもらえ
る」

「それだけ？わざわざ特待生にする必要はあったの？」

「既に爵位を持ってる者で、しかもお前は聖女として功績をあげてるのだぞ？」

軍役が必須でなければシュヴァリエを叙勲させたいと王家にも言われたほどだ。

一般生徒として入学させるほうが難しいと学院長から提案を受けて決まった事だ」

シュヴァリエ叙勲の話なんてはじめて聞いた。もちろん頼まれても断るつもりだが。

…しかし学院長からの提案か。何か嫌な予感がするな…。

魔法学院の長であるオールドオスマンは人格者ではあるが、必要とあれば手段は選ばない人間だ。

生徒を思いやる人のいい教職者なのだが、決して油断ならない人物。

「一応聞いておくけど私の名前は？」

「無論、ローラ・シュタイア・ド・リメジー・ド・ラ・フォンテーヌだ。本名は流石に不味いだろう」

「学院長が特待生の話持ちかけたのよね？」

「そうだが…。何か問題でもあるのか？」

…多分私の事で何か勘付いてるな…本名まではわからないと思うけ

ども。

後ろ暗い理由があることくらいはわかってるかもしれない。

「いえ、何でも無いわ。これから忙しくなりそうね…」

「入寮まで三ヶ月はある。準備するには十分な時間があるだろう？」

…そうじゃないんだよ公爵様。三女対策しなきゃいかんだ。

更に言うならタバサ対策とキュルケ対策も必須だろうな。

マチルダさんは約束があるからある程度は安心できるかな。

ギーシュやモンモランシは軽い友達付き合いくらいなら問題無いはずだ。

「そのあとが忙しくなるって意味よ。準備は必要無いわ。最低限の家具や衣類だけで十分でしょう」

「一応公爵家の孫娘なのだから、もうすこし体面を気にして欲しいのだが…」

「私は聖女よ？清貧に甘んじた生活をして問題無いでしょ？」

「お前のそれはただ面倒臭がつてるだけだろう…」

公爵は私の事が良くわかっていらっしやるようだ。

「それなりに豪華に見えるように努力するわ。無駄を増やせばいいんだよ」

「身も蓋も無い言い方を…。

私はこのまま公爵領に戻る。ルイズの入学準備もしなければならんからな。

誕生日を祝えなくてすまん」

「義母様に祝ってもらえれば満足よ。

プレゼントありがとう。感謝してるわ御祖父様」

台詞の後半はちょっとした意趣返しである。

公爵は私の感謝を聞くと、とても感動したようで凄く嫌そうな表情を見せて去っていった。

…まさか今の生活をぶち壊すのが公爵様で、しかも落とされた爆弾は核とは…

魔法学院入学とか私の中では絶対にありえない選択肢だっただけに想像もしてなかったさ…

とりあえず入学後の立ち回りを考えねばならんな…

しばらくは眠れぬ夜が続きそうです。一ヶ月くらいは寝なくても大丈夫な始祖の肉体が活躍するな…

8. 魔法学院

トリステイン魔法学院。

トリステイン王国の誇る、伝統ある格式の高い学院。

貴族の子息、令嬢が通い、魔法だけでなく貴族に必要な様々な内容を教える教育機関。

学院長のオールド・オスマンは生きる伝説とまで賞賛される高名なメイジで、他の貴族の信頼も厚い。

反面利権に絡む政争や、生徒達を巻き込むような政策には真っ向から立ち向かう勇敢さと老獪さを持つ教職者。

学院は三年生で、貴族が社交界に出る為の予行として様々なイベントが催される。

国内外から生徒を招くほど開けた学院でもあるために、外交問題の危険を常に内包する。

…そして物語の舞台であって、居れば巻き込まれる危険が異常なまでに高まる場所である。と…

馬車の行列の中、学院に入るまでに長い時間待たされている。そんな馬車が多く並ぶ光景を余所目に私は思索に耽っていた。

…社交界になんて出るつもりは無いし、魔法は本系統を教えてもらえないわけでもないからなあ…

主役達との交流を持たないようにする。というのは私とルイズの関係上難しいかな：

となれば、最低限の交流に留めておいて主役達からは嫌われるような立ち回りをして過ごすのが無難か。

私が避けるのではなく、相手に避けてもらおう作戦。

失敗したら取り返しがつかないような気もするが、気のせいだ。そう、私は上手くやれる！

「……様？お嬢様？」

「リディ：どうかしたの？」

「お嬢様にご挨拶をしたいといらっしゃった方が居るのですが、お会いになりますか？」

…なるほど、他の人も暇なんだな。

私は考え事で忙しいのだが挨拶くらいなら構わないか。

「会うわ。外で待たせてるのね？」

「はい。くれぐれも普段のような振る舞いはなさいますよう…」

リディの台詞を最後まで聞かず、馬車の外に体を出す。挨拶程度のために外まで出るのは正直面倒なのだ。

そこには金髪的美青年。造花の薔薇を右手に構えている。

…よりもよってギーシュ君か：

まあ、挨拶くらいなら問題ないだろう

「はじめましてミス。僕はギーシュ。ギーシュ・ド・グラモンだ。よければお名前をお聞かせ願えるかな？」

「はじめまして。私はローラ。フルネームは長くて言うのも面倒だから割愛するわ。

どうせあとで自己紹介の場でもあるだろうに、どうして態々挨拶回りなんてしてるの？」

自己紹介の時までは極力家名は名乗らない。可能な限り担い手と関わらないためだ。

「ず、随分個性的な名乗りだね…。

学院での自己紹介はどうせ味気ないものになるだろう？

それに君の馬車には家紋が無いからどんな人が乗ってるのか興味があってね」

「それは悪かったわね。家名を誇るような真似は嫌いな。

どうしても知りたかったら自己紹介の時まで待っていて頂戴」

「それは残念だ。是非僕は君とお近づきになりたいのだけれどね」

「家名を知らなきゃ仲良くもできないの？ならさっさと他所行ってくれないかしら？」

ギーシュの笑顔がだんだん引きつってきた。

「ど、どうやら君は長い事待たされて、その、機嫌が良くないみた

いだね。

また日を改めて挨拶をさせてもらうよ」

そう言うときーシュは逃げように去っていった。

…やばい、ちよつと可愛い奴だと思った。

気障な反面、少しおどおどした反応が私の庇護欲をかきたてるな…
ただギーシュは私に近寄ろうとしないだろうな、あの様子じゃ。

まあ私としては仲良くなりすぎてもダメだからこれでいいか。

そのあとリディに貴族同士の話し方について小言を延々と聞かされるはめになった。

やれグラモンは伯爵家だから目上の相手だの、男性が相手の時は相手を立てるのが淑女のマナーだの、家名の名乗りを恥じるなんて貴族にあるまじき行為だの…

リディの説教を全て聞き流しているとどうやら寮に到着したようで、荷物の運び入れを全て学院のメイドとリディに任せて私は学院長室へと向かった。

特待生の私は挨拶をする必要があったし、オスマン氏が何処まで私の事情を知っているかを確認しなければならなかったからだ。

コンコンコンコン。と四回ドアを叩く。リディに叩き込まれたマナーの一つだ。

以前、義母様の部屋にコンコンと二回ノックした事がある。

そのときリディは鬼の形相で走ってきて、当主の部屋はトイレじゃありません！と言い、その後2時間ほど説教された。

それはともかく、オスマン氏らしき声で「入りなさい」と言われたので入室する。

「良く来てくれたの。ミス・フォンティーン。それとも”聖女”殿と呼んだほうがいいかの？」

ともかく我がトリステイン魔法学院は君の入学を歓迎しよう」

「それはどうも。オールド・オスマン。それとも”狸爺”とでも呼んだほうがいいかしら？」

私みたいな厄介者をわざわざ招きいれてくれた事、言葉に出来ないほど感謝しているわ」

狐と狸の化かし合い勃発。そんなつもりは無かったのだが”聖女”なんて呼ばれたせいで少し頭に来了。

そもそも私は名前以外で呼ばれる事が嫌いなのだ。フォンティーンの名は嫌いではないのだが。

「ふむ、聞いたとおり中々強かで優秀なようじゃな。気を悪くしたならすまんかったの。

ラ・ヴァリエール公爵から話は聞いておるよ。

我々としても君のような優秀なメイジが学院に入る事は喜ぶべき事なのじゃ、厄介者等と思ってはおらんよ」

「私の性格を予め知ってて、あの挨拶？しかも厄介者と思っていない

のは他の職員であって貴方は違うでしょう？

余計な詮索や警戒は不要よ。じゃなきゃ以後ずっと”狸爺”と呼ぶ事になるわ」

「：では単刀直入に聞こうかの。学院に入った理由は何かの？

気を悪くするかもしれないが、僕は多くの貴族の子女を預かる身でな。警戒せねばならんのじゃよ」

「公爵様の陰謀よ：私は入学するつもりなんて無かったわ。それより貴方は私の何を知ってるのかしら？」

陰謀はさすがに言い過ぎかもしれないが、私にとっては迷惑な事だったので多少言葉が悪くなっても仕方無い。

それ以上にオスマン氏が何処まで私の事情を知っているかが、今一番問題だ。

「本人の意思では無いのか：。なるほどの。

僕が君について知ってる事は：そうじゃな。

元平民メイジの聖女。公爵家に取り入って成り上がった優秀なメイジという事。

男爵家の娘というが嘘である事。公爵家次女の治療の為にラ・フオンテイーヌの養子となった。それくらいじゃ」

実際はもっと多くを知っている可能性もあるが、話さないということとは誰にも言うつもりは無い。ということだろう。

知っている情報は特定できなかったが、それを触れ回らないなら私としては問題無い。

オスマン氏は確かに狸爺ではあるが、信頼できずとも信用はできる人物だ。

「随分優秀な情報網を持つてるのね…。

私からは問題を起こさないように努めるから安心して。だけど売られた喧嘩や不可抗力な事態については保障しかねるわ」

「それなら儂も安心じゃの。出来れば喧嘩も買わないで欲しいのじやがそこまで贅沢は言うまい。

ミス・フォンティーヌはなかなかの器量を持つてるようじゃし」

私をもっと器量よしだったら、こんな事態になってないと思う。

ユググにいいようにされ、不快なあだ名をつけられ、見通しが甘かったせいで公爵の策にはまったり、お世辞にも器量よしとは言えないだろう。

その後は特待生についての話や、取るに足らない世間話などに花を咲かせた。

特待生の特権は公爵様に聞いたとおりではあったが、それ以外にも面倒な式やイベントへの参加は自由にして欲しいとのお願いを聞き入れてもらえた。

入学式すら私は参加するつもりが無い。三女の関わる些細なイベントがあるはずなので参加したくない。

オスマン氏は日頃から気の休まらない生活をしてるらしく、気苦労が耐えないと愚痴をこぼしていた。

私に秘書になってももらえないか。などと頼んでくるあたり、かなり心労が溜まってるんだろう…。

：私も貴方に匹敵するくらい苦勞してるんだけどな：

ちなみに会話をしている間、ネズミはユッグの気配に怯えたのか、部屋の隅で震えていた。

：もし私の足元に来たら鍊金で銅像にしてやろうと思ってたのだが、要らん心配だったか。

まあそんなこんなでオスマン氏とは、非常に友好的な関係を築けたと思う。

先行きは相変わらず不安だが、初手で失敗を犯す事無く順調に事が進んだので一安心だ。

：間違っても、勇者一行候補とは仲良くならないようにしなきゃいかんけどな：

9. 叔母様と私（前書き）

若干アンチな内容を含みます。

9. 叔母様と私

魔法学院に入学してから私は、それはもう品行方正を絵に描いたように振舞っていた。

入学したといっても式には出ていない。

新人生歓迎パーティーにも参加していない。

危険だからである。

それらは勇者一行候補と関わる事が無いようにと考えている私にとっては第一級危険イベントだ。

リディがラ・フォンティーン領の義母様の元へと帰っていった為、私はそれはもう気持ちいいくらい何時もどおりに振舞った。

初授業もまだなので、他の生徒と会う機会は私にとっては食事の時だけなのだが、私は自室で自炊していた。

研究室として用意された部屋は、既にキッチンと食卓に変わっている。

研究なんてするつもりは無いので、どう使ったものかと迷った結果、盛大に改装した。ちなみに学院側の許可は取ってある。

”食事と医療の綿密な関係”を研究すると言い張ったわけだが。本

音は他の生徒に会いたくないからである。

美味しそうな臭いがするという、苦情のような声が他の生徒から聞こえるが無視だ。

食材は、厨房のコック達を治療診断することで対価として分けてもらっている。

黒髪のメイドがこちらをしきりに見ているのが凄く嫌な感じではあったが…

そんな具合に私は上手く勇者一行フラグをかわしながら生活していたのだが、遂に初授業がやってきた。

困ったことに私はイルのクラス。ルイズと一緒にのクラスのようなのだ。最悪の展開だが想定範囲内ではある。

要は仲良くならなければいい。親密になったら目も当てられない。適当に挨拶してはそれ以外で全く関わりあいにならないような関係が好ましい。

「皆さん。はじめまして。私はこれから一年君達に火系統の魔法を講義するコルベールです。

今日ははじめての授業ということで、まず始めに皆さんに自己紹介をしてもらいますぞ。

窓際の生徒から順に自己紹介をしていきなさい」

コルベール教諭がそう言うのと順に生徒達は自己紹介をしていく。私は入り口近く最後列に座っているので最後だ。他の生徒の自己紹介はまともに聞いていない。聞いたとしても覚えられないだろう。何しろ必要無いと思っっているのだから。

…あ…ルイズの自己紹介も聞いてなかったな…
まあいいか、一応は知ってる相手だし…

そうこうしてると最後の私に順番が回ってきた。

「私の名はローラ。ローラ・シュタイア・ド・リメジー・ド・ラ・フォンテーヌ。」

リメジー男爵家当主にして、ラ・フォンテーヌ家の養女よ。御学友の皆さん、これからよろしく」

皆一様に啞然とした表情を見せている。ルイズに至っては口をパクパクさせてる。陸に打ち上げられた魚状態だ。

皆が啞然としてるのは恐らく男爵家と言えども当主であるという事実に対してだろうか。

果ては、ラ・フォンテーヌ家に娘が居る事自体が衝撃なのかもしれない。

ルイズの驚愕している理由は、今更説明する必要が無い。

そんな空気の凍った教室で、コルベール教諭が口を開いた。

「特待生のミス・フォンテーヌですな。オールド・オスマンから話は伺ってますぞ。」

メイジの腕も優秀と聞いてますし、是非あとでお話を聞かせていただきたいものです」

「丁重にお断りするわ。私は火メイジが嫌いなの。他を当たって」

もちろん火のメイジが嫌いというのは嘘だ。コルベール教諭は勇者一行の一人にあたる人物だから近寄りたく無いのだ。

人物としては個人的に好ましいとすら思うのだが、コルベール教諭とは関わらないほうがいいだろう。

ちなみに火メイジが嫌い。というのは水メイジの多くが持っている感想の一つだ。

メイジという生き物は自分の系統に誇りを持っている。故に自己の系統が最も優れている。と謳うのだが、火メイジは賞賛の際に水系統を侮蔑する発言をしょっちゅうするのだ。

火の破壊力は素晴らしい、大して水は破壊に向かない弱き系統だ。などと火メイジであれば一度は言ったことがあるだろう程に水を見下す傾向がある。

「あああああんと！きよ、教師に向かって失礼よ！！」

桃色が何か吼えている。今後関わってこないように釘を刺すチャンスだ。

入学が決まってからずっと対策を考えてはいたが、妙案は出なかった。

なので、とりあえず嫌われようと努力することに決めた。好き好んで私に関わってこられると凄く困る。

「教師に対する敬いは持つてるわ。コルベール教諭のお誘いは生徒に対するものでなく私個人に対するものでしょう。

個人同士の会話に教師と生徒の立場は不要よ。

それに貴方の言う礼というのは二人の会話に横槍を入れるようなものの？」

「なな、なんですってえ!!！」

：教室の空気が絶対零度までいってしまった。ちょっと言い過ぎたかしらんね。

ルイズとの関係は無関心を通り越して嫌悪感。さらにはそれを通り越して犬猿の仲までいったか。

「二人とも落ち着きなさい。はしたないですぞ。

ミス・ヴァリエール。確かに私の誘いは個人的なものですから、気にする必要はありません。

それにミス・フォンテーヌ。相手を不用意にからかうような真似は慎むように」

コルベール教諭のおかげで教室の空気はある程度戻り、授業は問題なく進められた。

しかし、授業中ルイズがこっちをチラチラと睨むように見てきた。

：癩癩持ちで短絡的だっていう知識はあったけど、実際会ってみる

とこれはまた：

キュルケの気持ちが良くわかる。この娘はからかいたくなる：

私にはそんな余裕は無いので行動には移せないのがちよつと残念だ。

授業が終わるや否や、ルイズはこちらにズカズカと音が聞こえそうなほど負のオーラを撒き散らして歩いてきた。

「ちよつとあんた！話があるんだけど！」

思いつきり目を吊り上げ、不機嫌な表情を一切隠してる様子が無い。言うなれば余裕が無い。

「私には話す事なんて無いわ。それより貴方の今の顔…エレオノール様にそっくりね」

：なんということだ。余裕が無いはずなのについからかうような事を言ってしまった：

「なななな！！わわ、私がエ、エレオノール姉さまと、そっくり！？わ、わたしが！？」

私生き遅れるの！？で、でで、でもでも私には、し、子爵様が

らっしやるわ。そうよ！大丈夫。私は大丈夫…」

自覚が無かったのが驚きである。ヴァリエール姉妹で長女と三女は良く似てる。三姉妹を知る者にとっては有名な話だ。

さりげなくエレオノールが生き遅れだって言ってるのにも気付いて無いようだ。本人が聞いてたらどうなることやら…。

しかも婚約者の話まで暴露してる。周りの生徒は突然錯乱しはじめたルイズを見て驚いてるし。

「そ、それより！！何であんたがここに居るのよ！？私聞いてないわよ！」

「理由や経緯は公爵様に聞いて頂戴。説明するのも億劫だわ。

話はそれだけ？それなら私はもう行くわね。御機嫌ようルイズ叔母様」

そう告げて私はさっさと教室から逃げ出した。次の授業が実習で助かった。

後ろから「おぼっ！おぼ！」とか聞こえるが無視だ。付き合ってられない。

…ルイズと距離を置くための措置が全て失敗してる気がする。

というより今後は目の敵にされそうな雰囲気だなあ…

そういうのはキュルケにしてくれ…私の精神力はゼロよ…

虚無だけに。ってやかましいわ！

…私疲れてるんだな…

しかも精神力がゼロとか、精神力無限に活用する魔法が使える私にはありえないし：

それから数日、ルイズをあしらう日々を続けていると、それが噂として蔓延したらしい。

おかげで同学年の生徒には悉く避けられるようになった。物凄く性格が悪い人間を演じた甲斐があった。

ただしルイズだけは、いまだに突っかかってくる。それをまた私が叩き落とす。

そしてそれを見た生徒は、噂を更に加速させ、私はより一層避けられるようになる。

そんな負の連鎖が学院の風物詩のひとつとなった。

トリスティン魔法学院の”女帝”なんて呼ばれるようになったのはご愛嬌：これって王家への不敬にならないかな？

10. 嗜虐趣向

突然だが、メイジには実力を表す位、クラスというものがある。

ドット、ライン、トライアングル、スクウェア

それぞれ一度の魔法に掛け合わせる事のできる魔力の数を表している。

そして高いランクを持つメイジはそれを誇るものなのである。

では私はどうかというと。

水と土のライン。ということになっている。

実際は木のスクウェアなのだが、属性が認知されておらず、系統の特性も異端まっしぐらなので名乗れない。

同学年に居る生徒達の中にはトライアングルクラスを誇るメイジが二人居る。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。

ゲルマニアからの留学生で”微熱”の二つ名を持つ優秀なメイジ。

シャルロット・エレーヌ・オルレアン。タバサと偽名を名乗ってい

る少女。

ガリア王国の王族で”雪風”の二つ名を持つ北花壇騎士団の騎士。

この両名は下位クラスの生徒からのやつかみで、色々面倒な事件に巻き込まれたようだ。

その点、私は表向きはただのライン。そういった心配は殆ど無用である。

ラインに対してもやつかみは無いとは言えないが、同学年に優秀な二人が居てくれるおかげで私は何とか難を逃れている。

この先も目立つ二人が居れば、私は安泰だろう。そう思っていたのだが…

「では名乗らせてもらおう！僕は”流水”のスティックス！水のラインメイジだ！」

…何故こんなことになったのやら…

こうなった原因は数時間前、授業を終えて寮に戻ろうと廊下を歩いていた時に遡る。

「はじめましてミス・フォンティーン。少し話があるんだがいいかな？」

私は他の生徒から避けられているはずなのだが、いきなり正面から声をかけられた。

「私は貴方と話す事が無いわ。だからそこどいてくれない？」

「少し話をするくらいいいだろう？僕は君に興味があるんだ」

口説いてるのかと思ったが、確かこの男はキュルケの取り巻きをしてた上級生だったはずだ。

そんな人が私に何のようかと少し疑問に思ったのがいけなかった。

「ならさっさと質問なり何なりどうぞ？答えるとは限らないけど」

「君は水のラインメイジだと聞いてね。しかも特待生だと言うじゃないか。」

僕と同じ水のラインメイジとして純粹に興味を持ったんだよ。

「どうやって特待生になんてなれたのか教えてくれないか？」

少し不機嫌な表情を見せながらも、話の内容は普通だ。さっさと質問に答えて帰ろうと思った。

「私が少なくとも貴方より上手に魔法を扱うからよ。」

それに私は水のラインじゃなくて水と土のラインよ。」

「なんだと！君は僕が魔法を扱うのが下手だと言いたいのか？」

挑発したつもりは無いのだが何故かこの男は憤ってるようだ。

沸点が低すぎると思う。その様を見て少しいじめてやろう。なんて思ってしまった。

「そうね。ド下手糞ね。事前調査も御粗末でド下手糞みたいだし。挑発にも簡単にかかるようだし交渉もド下手糞。つまり貴方はド低脳の役立たずね」

…対ルイズ用の性格が出ちゃった。

最近ルイズ以外の生徒と会話なんてしてなかったからなあ…。

知らないうちにストレスでも溜まったのかね…。

「こ、これほどの侮辱ははじめてだ！僕は君に決闘を申し込む！僕の魔法の腕を見せてやる！」

「私に決闘を？正気なの？ド低脳が私に勝てるとか今時子供でもそんな夢は見ないわ。」

しかも魔法の腕を見せるとか、存在しないものをどうやって見ればいいのか教えてくれる？」

…それにしても、現在私はノリノリである。

最近はずっとルイズをいじめてばっかりだったから性格が悪くなってるかもしれないな。

確かこういう性格の人間をドSって言うんだったかな。

「そ、その生意気な口を叩けなくしてやる！ヴェストリの広場に来い！」

そこまで言い切ったんだ。逃げるなよ！」

男はそう言うのと肩を怒らせて大股で歩き去った。

私はその様を冷めた目で見送ったあと、広場に向かって歩き出そうとすると周囲が騒ぎ出した。

「じよ、女帝が決闘をするぞ！！」

「相手はステックスだ！」

「ボ、ボクも女帝に罵りたい！」

…三人目自重しろ、顔はちゃんと記憶したからあとで覚えとけよ。

いやご褒美にしかならんか？

っていうかアレ、確かマリコルヌとか言うギーシュの友達じゃなかったか？

命拾いしたなマリコルヌ。ギーシュという友が居たことに感謝しとけ。

…やっぱり確実に性格が悪くなってるな…

まあ今はこれで都合がいいはずだ。ルイズ対策的な意味で。

「ミス・フォンテイナー？」

誰だろうと思ひ声の方を向くと、入寮時以来全く接点の無かったギーシュが居た。

「ミスタ・グラモン、私に何か用かしら？」

「その、失礼かもしれないが、大丈夫なのかね？」

相手の上級生は実技が優秀だという話を聞いたことがあるのだが」

どうやらギーシュは、純粹に私の事を心配しているようだ。でなければこの状況で話しかけてきたりしないだろう。

「殺していいなら一瞬で終わるわ。まあそれは問題あるだろうし、せいぜい調教してあげるつもり」

「こ、ころし…って相変わらずだね君は…」

心配は無用だったようだ。僕は近く応援だけさせてもらうよ…」

…相変わらずなんて言葉を使うほど親しくは無いと思うんだけどな…。

まあ心配は不要だってことが伝わったならそれでいいか。

「私の心配するくらいなら、周りの女性への対応を心配したほうがいいと思うわよ？」

「僕は薔薇だからね、ときには周囲を傷つけてしまうこともあるのさ。」

君は傷がつかないほど頑丈なみたいだね」

「傷はつくけどすぐ治るの。水のメイジというのはそういうものよ。」

だから貴方も手をつけるなら水メイジをオススメするわ。傷ついたらままの女性は面倒くさいでしょう？」

さりげなくモンモランシーを推薦する。

「なら僕は君に手をつければいいのかな？」

推薦失敗。立候補になってしまった。

「私は冷たすぎて触れれば薔薇は枯れてしまうわ。他の人にしなさい」

「少しくらいなら大丈夫さ。思うよりも薔薇というのは強いんだよ？」

「なら広場までエスコートしてもらえるかしら？ ミスタ？」

「喜んで引き受けましょう。ミス」

：ギーシュ君なかなかノリがいいじゃないか。君の事が好きになりそうだよ。

でも周囲の女生徒から微妙な視線を感じる…。

これをものもしないモンモランシーは中々の大物なのかもしれない。

「ああ、そういえばミスタ・グラモン」

「ん？何だい？」

「調教して欲しいなら何時でもしてあげるから遠慮しないで言って頂戴ね？」

「え、遠慮しておくよ…」

「…ちょっとだけ本気で調教してやりたいと思った…私はもうダメかもしれない…」

11. 不滅のローラ（前書き）

戦闘描写苦手です。

上手く状況が伝わるか不安です。

11. 不滅のローラ

「では名乗らせてもらおう！僕は”流水”のスティックス！水のラインメイジだ！」

スティックスが高らかに声をあげる。

「私はローラ。二つ名は無いわ」

決闘の流儀に倣って一応名乗り、お互いに杖を構える。

「ところでスティックス、質問があるのだけど？」

「質問？言ってみるといい」

「勝敗の決め方を教えて貰えない？」

もちろん通例とされている勝敗の決め方は私も知っているが、これは念のための確認だ。

「杖を落とすか降参したほうが負けだ。

あれほど威勢が良かったくせに決闘の仕方もわからないのか？」

「わかるわけないでしょう。相手を殺さない闘いなんて理解に苦しむわ。

遺恨を残さないためには、相手は必ず殺さなきゃね……そう思わ

ない？」

スティックスは啞然としている。間違った事は言って無いと思うのだが……

周囲に集まった野次馬達は解りやすいくらいに引いてるみたいだ。

「だからね、私が勝ったら、以後私に関わらないって誓って欲しいの。

じゃないと、私は貴方の息の根を止めなきゃいけないわ。私はそれでもいいけど」

「ふ、ふん！いいだろうどうせ僕が勝つんだ、負けた時の約束なんていくらでもしてやる！」

……まあ実際は約束なんて必要無かったりするわけだ。

何しろこれから一生齒向かう気が無くなるように調教してやるからね。

「そう、良かったわ。ならさっさとはじめましょう。

合図は要らないわ。先手は譲るから何時でもどうぞ？」

「こ、後悔させてやる！」

スティックスは完全に平常心を失っているようだ。詠唱を始めるがその声が少し震えている。

恐怖によるものか、憤怒によるものかはわからない。

「マジックアロー！」

ステイクスの杖の先から魔法の矢が三本放たれる。

：一度の詠唱で三本か。ラインの中でも上位に位置する証だ。

だから同じラインの私に対してアレほどまで自信を保ってたのか。
避けるのは簡単だし、対抗して射撃すれば簡単に打ち勝てるけど
…！

魔法の矢はそのまま私に向かってくる。私は身動きせずそれを見つめていた。

ドズッ！ドズッ！ズバツ！

魔法の矢はそのまま私の体を食い破り、辺りに真っ赤な血液を撒き散らす。

左腕と腹部を抉り取り、右肩を削り取る。

その瞬間、観衆から悲鳴が上がる。

「ウ、ウワアアーーーーー！！」

「ひい！！」

「い、いやあああああ！！！！」

阿鼻叫喚。観衆は揃って思い思いの声を上げた。

男子生徒は惨状を見つめ固まり、女生徒は両手で顔を覆う。

そこに絶対零度とも言える冷たく良く通る声が響く。

「それで終わрикаしら？ 私はまだ杖を持ってるし、降参もしてないわよ？」

早く次の魔法を詠唱したらどう？」

スティックスは凍りついた。

相手から目を離れたわけじゃない。

だからこそ何が起きたのか全く理解できなかった。

確かに魔法の矢は相手の体に全て命中し、致命傷とも言える傷を与え、血も多く出ていた。

事実、そこに血の跡がある。地面も赤く染まっている。

けれど今日に映っている相手は傷一つ無く、平然と、何も無かったかのように立っている。それだけでなく冷笑さえ浮かべている。

「な、な、なにをした！？お、おまえ何で！！？」

スティックスは目の前の事態を正常に受け止める事が出来ずに声をあげた。

「戦いの最中わざわざ相手に説明を求めるなんて馬鹿なの？ああ、ド低脳だったわね。」

答えてあげる義理は無いわ。さっさと次の魔法でも詠唱したらどう？ 貴方は魔法を上手に扱えるんでしょう？」

観衆も息を呑み、ただただ事態を把握しようと努め、私を見つめる。しかし、スティックスは何もしないわけにはいかない。私の声を聞いてあわてて詠唱をはじめめる。

「ウォーター・ウィップ！」

水系統の最も一般的で、戦闘においては効率的とされる魔法。空気中の水分を集め鞭の形を取る変幻自在の攻撃魔法。

鞭は良く見れば凝固しただけでなく内部では水が激しく流れている。これなら通常のウォーター・ウィップより打撃力が高いだろう。

…なるほど、だから二つ名が水流なのか。

これが一番得意な魔法なんだろうけど、当たったら普通の人は死ぬぞこれ。

しかも狙いは頭か。もう完全に冷静さを失ってるなあ…
せっかくだしもつと錯乱してもらうか。

激しく脈動する鞭はうねりを上げながら勢い良く私の頭に打ち据えられる。

瞬間、私の首から上に真っ赤な華が咲いた。

岩をも容易く砕くであろう水の鞭によって吹き飛ばされたのだ。当然人に当たればそうなる。

ビチャビチャ！と血は周囲の地面を真っ赤に染めあげ、同時に何やらワカラナイ物が散乱する。

観衆はもう声を上げることも目を背けることも忘れ、ただ瞳孔を開かせ脱力した状態でその惨劇を見つめる以外になかった。

スティックスの表情は凄惨なまでに崩れ、眼の端に涙を浮かべ、口は大きく開けたまま”私の居た”場所を見つめる。

しかしそこに”在る”のは首から上が無く肩口まで真っ赤に染まった”ナニカ”だ。

誰が見てもそれは私だった物、私の亡骸だった。

その間1秒にも満たなかっただろう。

しかし次の瞬間。誰しもが眼を離さなかったにも関わらず。誰もが先ほどもで死体であると認識していたにも関わらず。

私は変わらぬ姿でそこに居た。

「それで？次は何をしてくれるの？」

私はクスクスと笑いながらスティックスに向かって言った。

しかし、スティックスは固まったまま動かない。否、動けない。今見てる物全てが理解できない。

スティックスが固まったまま動かないので、私はゆっくりと彼に向かって歩き出した。

カッン、カッン…と静まり返った周囲に音が響く。

「ヒイツ！な、な、なん…！」

彼の目の前にまで辿りつくどゆっくりと杖を向け、小声で詠唱を済ませておいた魔法を発動させる。

「アナスタシア…」

相手の神経を麻痺させる。所謂麻酔の魔法。受けた相手は動く事が出来ず、声を出す事も出来ず、眼を背けることも出来ない。

音は聞こえるし、眼に映る物は正常に捉える事が出来る。意識を保ったまま何も出来なくさせる魔法である。

本来は医療用に扱う魔法であるが、戦闘時に相手に使えば必殺に等しい効果を得られる。

殺すよりも残酷な魔法。ただ見聞きする事しかできず。その後自分が何をされようとも見続ける事しか出来ない。

杖が相手に触れなければ効果が無い魔法であるが、杖さえ触れれば勝利条件を満たす魔法。

…こういう使い方をするのは始めてだけど、こういう使い方をさせるためにユッグが考えたんだよね…

この魔法のいいところは相手を殺す必要が無いってことだな。

さて、これから調教してやろうかと思ったけど…

スティックスを見れば既に戦意は感じられない。絶望と恐怖を浮かべた表情で固まっている。

…最後に一度脅して終わりにするか…

「杖も離さない、降参とも言わない。困ったわ。これじゃ本当に殺しちゃうしか無いわね？」

他に方法がないから仕方が無いのよ？スティックス…だから…」

私はスティックスに顔を寄せ耳元で呟いた。

「私を恨まないでね？」

そう告げ、再度杖をスティックスの胸につけ…。

そこで突風が吹き、スティックスの右手から杖が落ちた。

風の吹いた方向を見るとそこには教師が二人並んで杖をこちらに向けていた。

…やっとかぁ。決闘が始まる前に止めて欲しかったんだけどな…。どうせオスマン氏の命で決着がつくギリギリまで止めないようにとかわれてたんだろうな。

学院長は私を信用してはいるが、信賴はしていないだろうから：

「ギトー教諭にコルベール教諭。もつと早い段階で止めて貰えんと助かったのだけど？」

それとも誰かさんの命令で今までずっと見てたのかしら？」

私の言葉を聞き、二人は険しい顔をする。

ギトー教諭は怒りの表情。コルベール教諭は悔恨の表情を見せる。

「お前は一体彼に何をしたんだ！？」

ギトー教諭の声を荒げる。

「ちょっと体を麻痺させただけよ。半刻もすれば元に戻るから安心していいわ」

「君は…彼を殺すつもりだったのか？」

コルベール教諭は何やら複雑そうな顔で質問をしてくる。

「そんなわけないでしょう。私は面倒事は嫌いよ」

「しかし先ほどの殺気は…」

…殺気なんて出した覚えが無いのですが…。
無意識に出てたとかそういうの感じかな？

「そもそも私は殺された側なのだけど？」

「しかし生徒同士の決闘は禁止されているのを知ってるだろう！？」

「決闘する事が禁止されてるのに貴方は今何をしてたの？
不幸な事故が起きないように何かをするべきだった。違うかしら
？」

「何が言いたいのだね…」

「決闘がはじまる前から見てたでしょう。貴方もギトー教諭も、オ
ールド・オスマンもね。

止めなかった人間に責められる謂れはないわ」

そう告げると私は寮へと歩き出した。

後日オールド・オスマンから呼び出しを貰ったが、お咎めなしと言
い渡された。

覗き見をしてたことを指摘したせいかもしれない。

ステイックスはあのあとすぐに快復し、以前と変わらぬ生活をして

いるが、私を見ると全力で逃げ出すようになった。

決闘を見ていた生徒達も、一時ショック症状が出ていたが数日もすれば収まったようだ。

そしてそれ以降、私には二つ名がついた。

”不滅”

…まあ、聖女よりは全然いいかな。

全然水系統って感じがしないが、事実私は水系統じゃないし構わないな。

ちなみに非常に、それはもうとてつもなく遺憾ではあるが、”女帝”の称号は未だに有効なようだ。

11. 不滅のローラ（後書き）

次回から原作時期に突入します。
正確には開始少し前からですが…。

1. 召喚の儀迫る

ローラとユッグの反省会。

いきなり何の話だと思ったかもしれないが、言葉のとおりである。何しろ学院に来てからの一年間、私は悪い意味でかなり目立っている。

決闘騒ぎが顕著な例だろう。なにしろアレだけの事をしたのだ。学院の生徒達からは完全に避けられ、余計な関わりは私には無い。それは狙い通りとなった。

逆にかなり浮いた存在になってしまった事が学院外の脅威に注目されるきっかけになる可能性が高いのが問題となる。
”魔法が爆発する”という異常でさえ深く触れない

問題なのは勇者様ご一行候補達との関係はどうか。という事。

虚無の担い手ルイズとは犬猿の仲。決して仲は良く無いが、一日一回は嘸み付いてくる。

私はその悉くを全て毒舌で返り討ちにしてる。関わりはあるが私を

仲間に誘う可能性は殆ど無いだろう。

ガンダールヴのメイドはこちらを気にする素振りを良く見せる。なので私は昔の事を覚えていないふりをすることにした。

挨拶は頻繁に交わすが会話らしい会話は今のところまだ無い。これからもこの調子なら大丈夫そうだ。

ガンダールヴの親友ギーシュとは知り合い程度。仲は良いほうだと思ふ。会えば挨拶をする相手だが会話は長く続かない。

会話の内容も芝居染みた冗談半分なものばかり。最近モンモランシーと仲が良いみたいだから私に関わる頻度も下がるだろう。

ギーシュの恋人モンモランシーには目の敵にされている。正直私からしたら面倒臭い。話しかけられる事はまず無いのが救いだ。

挨拶すらすえ私の事を睨んでくる程度だ。これからも進んで私に関わろうとはしないはず。

キュルケとタバサはそもそもクラスが違う。接点は殆ど無い。ルイズはキュルケといがみ合ってるようだが私に飛び火はしていない。ただ決闘騒ぎの後になってから、二人の視線を感じる事がある。キュルケは自分の取り巻きが凹にされたことを気にしてるのだろう。タバサは私を警戒してるような節がある。ちょっかいかけられたら面倒だが今のところそこまでは至ってない。

コルベール教諭は決闘騒ぎ以来、目立った動きも無く表面上は私とも教師と生徒の関係を貫いている。

恐らく私との接し方を決めかねているのだろう。私は彼に教職者失格の宣告をしたようなものだ。思い詰めすぎないようにして欲しいとは思ふ。

次いで危険度が低い者達との関係。

オスマン氏とは利用し合い、警戒し合うという微妙な関係である。ただお互いがお互いを信用している点は大きい。

決闘騒ぎ以降は、お互いに出来る限り不干渉を貫くという事で話はまとまったので現状維持が好ましいだろう。

マルトーとは友好関係にある。これは私が使用人達の医療活動を一手に引き受けてるせいだろう。対価は貰っているが。

聖女の話振られた際に、一時期そんな事もしてた。と話すとやたらと友好的になってくれた。

彼は勇者様一行候補と仲は良いながらも、物語に関わるほどの危険は少ないので安牌だろう。

ギーシュの友達であるマリコルヌは学院内でルイズに次いで私にちよっかいをかけてくる。のだが…。

どうも私に罵倒されたり冷たくあしらわれるのが目的らしい。キモチワルイ事この上無い。まあ今までどおりで問題無いと思いたい。

レイナールとギムリは接点が殆ど無い。というよりも決闘騒ぎを目撃したようで、私を避けているようだ。

今の状態であれば今後も何かあるとは思えないし放置しておいていいだろう。

スティックスとヴィリエはお互いトラウマを植え付けられた同士、気が合うのか二人で居るところをたまに見かける。

お互い情報を交換しあっているらしく、二人とも私を見ると全力で逃げる。それはもう気持ちいいくらいに全力だ。現状維持推奨。

「冷静になって考えてみれば、勇者様一行候補とは順調に疎遠になれてるわね」

「ククク、本気か？良く考え直したほうがいいのではないか？」

「わかってるわ……。少しくらい現実逃避させてくれてもいいんじゃないの？」

そう、とんでもない問題がある。

それはロマリアとガリアの二ヶ国だ。

オスマン氏の協力によってトリステインには私に関する報告は特にいってないはずだ。

前王が崩御され、王座は空位なおかげでそんな余裕も無いだろうが。

しかしロマリアの新教皇ヴィットーリオは担い手にして覗きが趣味という傍迷惑な奴だ。

ルイズの虚無にも早期から気付いてるだろうし、そのついでに私の暴れっぷりを見られた可能性がある。

ただ、ロマリアには私の血筋、つまり亜人のハーフだということがバレなければ早々問題にはならないと思う。

ガリアに関してはかなり悪い状況だ。何しろタバサという間諜が居るのだ。

ほぼ確実に私の存在はバレている。あの賢王が私に興味を示したかどうかだが、ほぼ間違い無く興味を持っただろう。

一応、あの不死性については幻覚を見せる毒と魔法の応用だ。と公言しておいたのだが…。

タバサが私を警戒してる節があるのはそれが原因かもしれない。確か母親が幻覚作用のある毒に侵されていたはず。

というわけでさし当たっての一番の問題はガリアである。

「ガリア対策をどうするか。いい案が思いつかないわね」

「もっと差し迫った危険があるのに気付かぬのか？我を楽しませようという心意気は良いものだがな」

「差し迫った危険？近々あるイベントなんて使い魔召喚くらいしか…！？」

気付いてしまった。

使い魔召喚でガンダールヴが出てくるのはまだいい。他の生徒達は何を呼ぼうが関係は無い。

何しろ私はそれら全てに関わらないつもりなのだから。

しかし私の使い魔は話が別だ。何しろ過去に例の無い系統魔法の使い手なのだから。

それこそ何が召喚されるか想像も出来ない。確実なのは過去例に無いモノを召喚だろうということだけ。

そんなモノを召喚したらどうなるか。最低でもアカデミーに呼び出される。それは困る。

対処の方法は多くない。

そのうち一番確実性が高いのは、使い魔召喚の儀の前に先に召喚を済ませてしまうことだ。

問題は少なくとも学院の教職者の誰かに、使い魔が居る事を証明しなければいけない事。

そしてそれを頼む相手はオスマン氏しかありえない。

しかしオスマン氏は現在私に使い魔が居ない事を知っている。

更に使い魔に関せずとも私の動向に常に注意を向けているため、欺いて召喚することは難しいだろう。

「物凄く面倒ね。正攻法は無理かしら…」

「ふむ、知恵を貸してやろうか？」

「お断りするわ。対価はこれ以上払いたくないの」

ユッグにこれ以上、私の生活を乱されてはたまらない。今ここまで困窮してるのも元はユッグのせいだ。

以前に簡単な協力を依頼したときでさえ、担い手との遭遇を強いられたのだから…。

「狭量なことだ。しかしお前がどうするのかを楽しむのも一興か」

それから私は暫く思索にふけた。

：見られる可能性があるなら見せてやればいい：か？

人払いを完璧にした状況でオスマン氏立会いの下に召喚をする。

理由は：、偽名での召喚が嫌だから。とでもすればいいかな。

今更私の本名がバレたからって、オスマン氏は好んで争いを好む性格じゃない。

大体、過去の事件はいくら調べたところで”兄に謀殺された私”

としか分らない。実母の素性は隠蔽が完璧なはずだ。

義母様に関する事も先王が崩御した今は、王家もそれどこじやないと思う。

「それで？どうするか決まったのか？」

「隠しても無駄なら、堂々とやるわ：。学院で唯一信用してる相手の前で」

召喚されたモノ次第では裏目に出る可能性があるが、オスマン氏のことは信用してる。

最悪な結果になったとしても、この作戦なら損害は抑えられるだろう。

厄介なモノが召喚されそうな予感はあるんだけど…生命系統を象徴する生き物って何だろう…植物？

◆ 重要なお知らせ ◆

年内は更新していく予定であると公言しましたが、本日より本作を一時凍結とさせていただきます。

丁度キリが良いところですので、現状の状態で全話の見直しと手直し。及び書き溜めの作業に入ります。

話の流れが大きく変化する事はありません。

説明や表現が不足している部分の書き足しが主になる予定です。

以後の展開に関しても表現が未熟であると判断できる箇所が幾つも見つかったので、現在の書き溜め分の手直しもする予定です、
暫し期間を開けることになります。

自分で納得できないものをこれ以降も投稿し続けるのが、私自身許容できないのでこのような処置をさせていただく事にしました。

更新再開の見通しは現在では未定とさせていただきます。

ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

また今までと変わらぬ更新を期待されていた方にも重ねて謝罪させていただきます。

活動報告にて進展があった場合や、更新の見通しが立った際には報告を上げさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4729p/>

ゼロからの逃避行

2010年12月29日08時17分発行